俳人とは云へなかつたやうな觀があつた。芭蕉の生前既に路通（元祿四年六月、月山に登り、月の山發句合を出す）・支考（元祿五年五月、芭蕉に、この心推せよ花に五器一貝の餞別吟がある）があり、次で桃隣（元祿九年三月十七日、陸奥衙（ヤガリ））があり、沾德（文蓬萊序）・立國（元文元年六月二十日、月見ヶ崎）・北華（同三年三月二十二日、蝶の遊）・千梅（同三年四月、若葉の奥）・馬州（元文五年、奥羽笠）・蕪村（寛保三年、松島天麟院の和尚から埋木の硯箱を貰ひ、重いので、白石の宿屋の椽の下に捨てたといふ逸話がある）・蓼太（同年、奥の細道拾遺）・宋屋（延享二年九月十六日、六十二歳、杖の土）・蝶夢（寶暦元年三月京出立、松島道の記）・秀國（明和元年七月一日、青森・外ヶ濱廻り、奥羽行記）・行雲（同二年三月、京より、六十九歳、笈の細道）・泉明（同六年二月十二日、大阪より、東花帖）・曉臺（同七年三月十八日、しをり萩）・白雄（同八年、銚子より、奥羽紀行）・大江丸（同年、大阪より）・諸九尼（モロクニ）（同八年、石山より、五十八歳、秋かぜの記）・百明（天明四年二月二十五日、銚子より、奥往來）・玉屑（寛政六年三月六日、播磨より、東貝）・一茶（享保元年前より、文政二年四月出立中止、文政八年四月十六日、六十三歳、外ヶ濱廻り）・素兄（明治十四年十一月、おくの雪道）其他二日坊（陸奥日記）・以哉坊（奥羽行）・黒露（俳諧硯澤）・既白（寶暦九年、菰一重）・竹齋（文化七年、句安奇禹度）などがあつた。「むつのゆかり」の拍新甫の序に、「今や海内の好士、ひとたびは松島の松に風雅の操をたくらべんとて、杖を曳き駕を馳する人ひきもきらず。云々」（萬延元年）とある。以て細道流行の餘勢を知るべきである。

註書、「奥細道菅菰抄」、梨一著、安永七年刊。半紙本二冊。上卷は越中富山の直生といふ者に草稿を奪はれ、後記憶を辿つて書いたものであると。古來有名な書であるが、故事、出典の註解にとゞまり、物足りない。「同、附錄」、同、文政十二年寫、半紙本一冊、少波の書寫。菅菰抄の奥附に、追而出來とあるが、刊行されなかつたものらしい。内に細道行脚中發句（附合）拾遺祖翁行脚掟・壺碑圖・木曾義仲願書・義仲副書加州小松八幡宮寶物緣起其他がある。

「鼠頭奥之細道」鶯宿著、安政五年刊、大本二冊、本文に頭註を加へただけ。蕪村の畫の模刻が入る。「奥の細道通解」馬場錦江著、安政五年序、大本三冊寫。自筆稿本は四卷二冊物で、最後の一卷を缺き、太田神社參詣の條迄しか註がない。從來の著書中最も親切、丁寧に出來てゐる。但し本文が普通の原本に比して辭句の相違が甚しい。「おくのほそ道引證」谷川護物著、半紙本一冊、稿本。内題に「奥迺細美知考」とある。護物の自筆本といふ點が珍らしいだけ。註も舟を借りて松島に渡る云々といふ所までしかない。成年未詳。

明治以後の註書は、三宅邦吉氏の「新釋奥細道」明治四十四年刊。黒澤敎一氏の「奥細道詳解」大正九年刊。小林一郎氏「奥細道詳釋」大正十年刊。荻原井泉水氏の「奥の細道贅註」大正十四年九月早稲田文學に載す。其他大藪氏の新研究岩田氏の「奥細道詳解」等がある。

八、晩年時代

伊勢・伊賀に遊ぶ　伊勢の遷宮を拜まうと、揖斐川を下つた芭蕉は、内宮へ來て見ると既に事定まり、外宮の遷宮を拜む事になつた。

尊さに皆押合ひぬ御遷宮

中村といふ所で、

秋風や伊勢の墓原なほすごし

又玄亭にとゞまり、妻の健氣なる心に感じ、光秀の妻を思出し、

月さびよ明智が妻のはなしせん

伊賀の山を越えた時、

初時雨猿も小蓑をほしげなり

猿蓑の巻頭吟で、其角が俳諧の神を入れ給ひければと云つた句。竹人の「全傳」に、「直に九月上旬伊勢の遷宮。萬菊・路通・卓袋に逢ひ、久居二三日のやどり後、李下を伴れて伊賀にかへり、霜月迄逗留（李下は一宿、路通はしばらくあり）。曾良も來り、東に別るゝ日、奈良の隣のしぐれかなといふ句あり。云々」とある。配力亭にて（杉野氏、通稱勘兵衛。享保十七年歿。八十一）

人々をしぐれよ宿は寒くとも

此時水鷄笛と云ふものを、頭陀袋から出して、配力に附與した。「全傳」に、近江の人の餞別の具とあるが、之は近江の游刀の贈つたもので、直徑一寸三分ほどの陶器製の物、靈極と銘があるといふ。又芭蕉は一笑からも水鷄笛を貰つてゐる。一笑宛の禮狀が殘つてゐて、娯みに吹くのは面白いが、殺生のために吹くのは感心しないといふやうな事が書いてあつた。伊賀の一笑であらうが、之とは別物であると見える。

半殘興行、一入といふ者の會に、

冬庭や月をいとなるむしの吟

平冲亭にて、

屏風には山を畫いて冬ごもり

後に金屏の松のふるさよと改める（竹人全傳）。

十一月朔日、上野良品亭にて。芭蕉・良品六吟歌仙。」

いざ子供走りありかん玉霰　芭蕉

折敷に寒き椿氷仙　良品

良品は友田氏、覺左衞門、伊賀上野人。藤堂家の臣。享保十五年歿。六十五。」

十一月末日、路通同道にて、奈良の祭見物。それより大津に出る。

大佛榮興をよろこびて

初雪やいつ大佛の柱立

京に上り、去來が落柿舍に遊び、徹夜して鉢叩をきく。十二月二十四日、去來の鉢叩辭がある。

長嘯の墓もめぐるか鉢叩

十二月末日、大津の乙州亭に入る。

何に此師走の市へ行く烏

乙州は川井氏、通稱佐右衞門、大津の問屋である。智月の弟で、智月の夫佐右衞門の歿後、養子となる。寶永年中歿。「それ〴〵草」の著がある。智月は宇治の產、若い時或御所に仕へ、歌路と云つた。寶永三年歿。行年七十四。

元祿三年、芭蕉四十七歳の春を乙州亭に迎へる。

薦を着て誰人ゐます花の春

正月はじめより二月迄伊賀在住。百歳亭（西島氏）にて、九吟歌仙成。

鶯の笠落したる椿かな

古井の蛙草に入る聲　午木

二月、園女（ソノメ）亭を訪ふ。

のうれんの奥ものゆかし北の梅　園女

花までは時雨れて殘れ檜笠　芭蕉

宿なき蝶をとむる若草

園女は本姓度會氏、伊勢松坂の人。山田の醫斯波一有（渭川）の妻、元祿二年冬芭蕉入門。大阪に住し、夫歿後江戸に下り、智鏡と改め、冠里公（安藤大和守）の母に仕へる。變つた女で、大な籠をかぶつて男に見えたり、袖の下を切つて下駄の鼻緒にしたり、文庫の蓋を流しに用ひたり、髮の毛を頭に二十本ほど殘したといふ。前句附の點者として有名であつた。享保十一年四月歿。六十三。

三月十一日、伊賀荒木村白髮の社にて、

畠打つ音やあらしのさくら麻

風麥亭にて、芭蕉・風麥・良品等七吟歌仙。

木のもとに汁も膾もさくら哉　芭蕉

明日來る人はくやしがる春　風麥

後此句を立句とし、珍碩・曲水の三吟歌仙がある。「ひさご」に出る。伊賀の與野といふ所に花垣の庄があつた。

一里はみな花守の子孫かや

橋木子の許にて（藤堂丹羽）、歌仙一折

土手の松花や木深き殿造り

氷固宅にて一折、氷固は松本氏、後非群と云。

きり〴〵すわすれ音に鳴く炬燵哉

路通の奥州行餞別、

草枕まことの花見しても來よ

大津の珍碩が洒落堂に至り、洒落堂記を作る。

四方より花吹入りて鳴の海

幻住庵閑居　四月のはじめ、芭蕉は近江石山の奥、岩間山の後、國分山の幻住庵を修覆して住んだ。此庵はもと菅沼曲水の伯父菅沼八郎左衞門範元（膳所の城主本多隱岐守の家臣。五十二歳で出家し、當山にかくれ、天和三年歿。行年六十二。法名を幻住庵探山居士といふ。）の住家であつた。非常に閑素な場所で、山は東南にそばたち人家よきほどにへだたり、南風峯より吹き、北風湖を渡つて涼しく、日枝の山・比良の高根・辛崎の松は霞にこもり、笠取山に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗取る唄、螢とぶ夕やみ、水鷄の叩く音、美景足らずといふ事はない。殊に三上山は富士の俤に通ひ、田上山（タノカミ）には古人の舊跡がある。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲んで自ら炊ぐ。或は持佛一間をへだてゝ、夜具を入れる場所を作り、枕もとの柱には、木曾の檜笠や越の菅蓑をかける。丁度筑紫の高良山の僧一如僧正

が上洛したので、幻住庵といふ三字を額に書いて貰つた。話相手は宮守の翁・里の百姓で、猪が稲を食ひ荒らしたとか、兎が豆畠にころげ込んだなどといふ農談に興じ、夜になると、灯をかゝげて、自分の影法師に運命を觀ずるなど、まるで病人が世を厭ひ住んでゐるやうな有樣であつた。

先たのむ椎の木もあり夏木立

八幡宮の附近は椎の木が多く、椎の木は隱者の住居にふさはしかつた。芭蕉はやがて出でじと定めたのであつた。

幻住庵入りは曲水の斡旋であつた。二月十八日附、曲水宛の手紙に、「幻住庵上葺被仰付候由珍重存候。浮世の沙汰少々遠きは此山の事と折々のねざめ難忘候。露命にかゝり候はゞ、ふたたび薄雪の曙をと被存候。云々」とあるから、前方から入庵を待つてゐたらしく思はれる。併し入つたものゝ、だん〳〵涼風が立つやうになると、寢冷え病ふ秋の山で、體に害になると見え、八月は下山したやうであつた。七月十七日附。牧童に與へた手紙によると、「拙者儀山庵秋至候ては、雲霧に痛み候て、病氣に障り候故、近日出庵致し、名月過には何方へなりとも、風にまかせ可申と存候。云々」とある。

其他幻住庵生活は猿蓑の几右日記にある如く、近江・京・尾張の門人が訪れて、或は紙帳を贈つたり、麥の粉を持參したりして、師のつれ〴〵を慰めたのであつた。江戸の嵐蘭は元祿四年三月幻住庵を訪れて、「春雨やあらしも果てず戸のひづみ」と詠んでゐたから、四年の春は既に人無き空庵となつた。芭蕉歿後の幻住庵は、膳所の靈椿がしばらく守つてゐたが、後其庵を膳所の城西別部村に移し、寄附を募つて再興した。併しもとの庵の跡は荒れ果たたので、庵の方角を正し、安永二年蝶夢石を建てゝ幻住庵舊趾と刻した。

幻住庵記　幻住庵の文には三種の草稿が傳はつてゐる。或人（支考）の說によると、始の一通は落柿舍にあつて（眞蹟拾遺所載の幻住庵記か）、文章の無用をすぐ

り、中の一通は幻住庵賦（和漢文藻所載）で、文章の花美を揃へ、終の一通は猿蓑の幻住庵記で、文章の花實を整ふといふのだが、賦は必ずしも花美を揃へたものとも考へられない。支考の「古今抄」に、元祿七年秋、芭蕉は伊賀の西麓庵に於て、貞享以後の文稿をすぐつて、十餘篇點檢した時、幻住庵記の魂吳楚東南に走りの文論があつて、「魂吳楚の三字より、其餘の未練は指を倒すにつきず。」と云つてゐるが、之は支考の意見らしく、從つて賦は芭蕉の草稿としても、支考の手の加はつてゐる疑が濃厚である。その筆力も到底猿蓑の幻住庵記に及ばず、落柿舍に在る文よりも平板・冗長な感がする。幻住庵の文は芭蕉も大に練つたもので、去來に文通して批評や加筆を乞うた所を見ても、辭句の面白くないものは、猿蓑に載せるわけはなからうと思ふ。

幻住庵記の註書には、護物の「あしのひともと」（文政十年刊）、櫻門（サクラカド）の「幻住庵私解」、雁來の「幻住庵几右日記解」（文政四年）、道舊の「幻住庵記略註」等があ

る。

曲水（曲翠）は菅沼外記と云ひ、膳所の城主本多隱岐守康慶に仕へ、五百石を食んだ。馬指堂と號し、剛直な人であつた。君側の奸臣を殺して自殺したとか、奸臣に誤られて自殺したとかと傳へられてゐる。とにかく家は斷絶し、妻破鏡は尼になつて、勝津にかくれた。

四月中芭蕉は勢田に螢見に行つた。四月二十一日附、去來に送つた手紙によると、上林三入老の宅で、

螢見や船頭酔うて覺束な

と詠み、去來に宇治へ來い、大阪から杉風も直に來るといふ文面であつたが、杉風は來たものかどうか分らない。

六月、秋之坊が來て二泊した。

我宿は蚊の小きを馳走かな

丈草入門は芭蕉幻住庵在住の時らしい。史邦（フミクニ）の紹介と云はれた。丈草は尾張犬山の城主成瀬氏の異母弟寺尾土佐守の家臣で、醫師の中村史邦と主君を同じくした。指に傷があつて、刀の柄を握れないから、出家したといふ説があるが、腹違ひの弟に家を讓るために病と稱して出家したのであらう。犬山先聖寺の玉堂和尚に參禪した。漢詩に巧で、洒脫な人であつた。佛幻庵・懶窩道人の號があつた。芭蕉門中去來と肩を比べる人で、衆望があつた。芭蕉歿後粟津の龍ヶ丘に住み、芭蕉の墓に仕へた。寶永元年二月二十四日歿。四十三。「寐轉草」の著がある。

粟津の無名庵　八月、芭蕉は粟津義仲寺の境内なる木曾塚の傍の無名庵に入つた。正秀宛の手紙に、「粟津草庵の事、先は御深切之至忝存候。兎角拙者浮雲無住之境界大望故、如此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候樣に御取持奉賴候。云々」とあるから、無名庵入りは正秀の周旋と見える。十五日、尙白と月見。

月見する座に美しき顔もなし　芭蕉

庭の柿の葉みの虫になれ　尙白

大阪の之道・珍碩と三吟歌仙。

白髮ぬく枕の下やきりぐす　芭蕉

入日をすぐに西窓の月　之道

之道は槐本久左衞門、大阪道修町の藥屋。伏見屋と稱する。後諷竹と改號。去來・李由來り、蒟蒻と柿を土產に持參。

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

敲戸の人々に對す。

草の戸をしれや穗蓼に唐辛

九月九日、乙州一樽を携へ來る。

草の戸や日ぐれてくれし菊の酒

堅田に遊び、風邪をひき、漁師の家に臥す。

病雁の夜寒に落ちて旅寐哉

九月二十一日の條下に、鬼貫が石山のかへり、鬼貫の「犬居士」、禁足之旅行記、芭蕉庵を訪れ、「我に食はせ椎の木もあり夏木立」といふ句を作つたとあるが詳かでない。又芭蕉と附句して、「御膳がよいと松風の吹く」とし、はじめて無心所着の場を知つたといふ説も信じられない。

無名庵を出た芭蕉は、大津・膳所・京などに遊び、旅心落着くひまがなかつた。路通の境遇に同情して、

住みつかぬ旅の心や置炬燵

洛の雲竹の自畫像に賛して、

こちらむけわれも淋しき秋の暮

十二月末、京都退出。大津の乙州が新宅に春を待つ。

人に家を買はせて我は年忘

今歳は秋より冬にかけとかく病がちであつた。痔は起る。手はふるへる。足はいたむ。奥羽旅行はよほど體に利いたらしい。

元祿四年、芭蕉四十八歳。湖頭の無名庵に春を迎へ、三日閉口、題四日。

大津繪の筆のはじめは何佛

竹人の「全傳」に、「同じく四未の歳、正月始大津より伊賀に來り、薪の比（薪能二月七日より十四日迄）南良に行き、伊賀にかへり、三月末また大津に在、冬まで爰かしこ歴覽、霜月はじめ粟津より東武に歸庵（桃隣同行）。」とある。卽ち正月、卓袋亭月待、百歳亭歌仙、赤坂の庵、乙州江戸下り餞別、三月二十三日萬乎別墅一折等の句作があつて、三月末粟津の無名庵入り、尙白等と湖水を眺望し、

行春を近江の人と惜しみける

嵯峨の落柿舍に遊ぶ　次で尙白と浪花に下り、相國寺・上醍醐・嵐山など吟行、四月十八日、去來の落柿舍に入つた。落柿舍はもとは數寄を凝らした住居であつ

たが、今は頽破し、淋しい草庵となつた。三井秋風の隱宅で、愛妾が住んでゐたといふ說もあるが當になりさうもない。去來は貞享頃こゝに住み、元祿の末之を毀ちて、聖護院のほとりに移つた。落柿舍記がある。芭蕉は先づ白氏文集・本朝一人一首・世繼物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を坐右に置き、蒔繪の重箱にさま〴〵の菓子を盛り、名酒一壺盃を添へる。蒲團や臺所道具は京から持つて來て十分である。我貧賤を忘れて、淸閑を樂しむと云つた芭蕉、芭蕉ならずとも好もしい隱栖であらう。

滯在は五月四日迄、其間小督の墓を尋ねたり、

うきふしや竹の子となる人の果

凡兆夫妻・去來などと、五人で一つ蚊屋に寢て寢付かれず、夜中に起きて、菓子を食つて語り明かしたり、人が來ないで淋しいからむだ書をして遊んだり、

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

千那・李由・丈草・史邦がやつて來たり、乙州は江戸から歸つての土產話、曾良は芳野の花見話などがあつて、閑居相應なたのしみはあつた。明日は落柿舍を出ようと名殘を惜しみ、

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

嵯峨日記　以上の日記を嵯峨日記といふ。草稿は史邦の手に入つたものらしく、刊本としては魯玉の寶曆三年本古く、別に城田氏の芭蕉眞蹟の模刻もある。

粟津無名庵月見　落柿舍を立つた芭蕉は京に遊び、四條河原の夕凉に都の繁華に驚き、それより大津の本間主馬（丹野と號す。能太夫）の家に招かれ、又湖仙亭に遊び、膳所の曲翠亭に赴いて句作した。

八月、芭蕉は無名庵に入つた。支考の「笈日記」によると、十四日（待宵）は楚江亭に遊び、十五夜（名月）は木曾塚に集まり、十六日（十六夜）は堅田の浮御堂に船を泛べた。此三夜を月の本末と名け、路通に待宵の文、支考に名月の賦、

芭蕉に十六夜の辯があつて、竹内氏（成秀）の許にとゞめたとある。

米くるゝ友を今宵の月の客　芭蕉

やす〳〵と出でていざよふ月の雲　成秀

舟をならべて置きわたす露

芭蕉・成秀・路通・丈草・惟然・正秀其他歌仙成。」

十六夜や海老煮るほどの宵のやみ

浮見堂に吟行

鎖あけて月さし入れよ浮見堂

無名庵の月見は乙州・正秀・洒堂・丈草・支考・木節・智月・惟然其他が集會し、乙州は酒を持參、正秀は茶をつゝみ、洒堂の茶好、丈草の酒好、智月の霜枯れたる、惟然の飄乎たる、とり〴〵面白い月見であつた。十月、李由が平田村の寺に宿る、李由は元祿三年秋頃の入門であらう。近江平田村光明遍照寺の住職、亮隅上人といふ。俗姓は月澤氏、伊豫河野氏の後裔といふ。四梅廬と號する。許六と親しく、篇突・韻塞の共著がある。寶永二年六月歿。四十五歳。

大垣の斜嶺亭に至り、斜嶺・如行・荆口・文鳥等九吟成。

もらぬほどけふは時雨れよ草の屋根　斜嶺

火を打つ聲に冬のうぐひす　如行

一年の仕事は麥におさまりて　芭蕉

「初便」に、「此第三を十餘句ほどせられて、後座がしめりたりとて、此句に決せられたりと、其連衆の語るを聞きぬ。云々」とある。芭蕉の句作のおろそかでなかつた事が分らう。

十月二十日頃熱田梅人亭に宿る。支考・桃隣同伴。

水仙や白き障子のともうつり　芭蕉

炭の火ばか冬のもてなし　梅人

三河の新城（シンジロ）に至り、白雪の二子に桃先・桃後といふ號を附ける。芭蕉・白雪・桃隣・支考等十二吟歌仙成。

其匂ひ桃より白し水仙花　芭蕉
土屋わら家の並ぶうす雪　白雪

白雪は太田氏、通稱金十郎、升屋金左衞門といふ。「三河小町」の編がある、享保二十年歿。七十五歳。

菅沼耕月亭（新城の家士、菅沼權右衞門）にて、

京にあきて此木枯や冬住居

三河の鳳來寺に詣る。道すがら病起りて、麓の宿に一夜を明かす。

木枯に岩吹きとがる杉間かな

島田の塚本如舟の家に至る。如舟は通稱孫兵衞と云ひ、芭蕉往來の勞を助けた家で、芭蕉並に門人の筆跡を多く所持した。

宿借りて名をなのらする時雨哉

歸庵　十一月の初江戸に着く。奥羽行脚より三年を東西に漂泊し、やうやく歸來したので、門人うれしがり朝夕訪問する。

都出て神も旅寐の日數哉

併し直に芭蕉庵へ入つたわけではなく、一時橋町に寓居して居つた。一說に番町に越年したともある。

ひさご　珍碩撰。一冊。元祿三年六月刊。成年は同三年三四の交であらう。珍碩は濱田氏、近江膳所の醫。道夕といふ。洒堂とも號し、元祿六年大阪に移り、晩年膳所にかへる。許六の自讃之論上に、「路通・洒堂如き者一生の行跡さぞ〳〵亂墮ならん。云々」とある。芭蕉より梅の錠といふ傳書を傳へたと僞る。「深川集」・「市の庵」の編がある。「ひさご」は珍碩・正秀・乙州等を中心とした近江蕉門の撰集であるが、古來正風に醇な撰集として、猿蓑集と並稱された。連句五歌

仙より成り、最初の木のもとに汁も膾の卷が一番よく出來てゐた。初裏、

巡禮死ぬる道の陽炎　曲水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　芭蕉
文書くほどの力さへなき　珍碩
羅(ウスモノ)に日をいとはるゝ御かたち　曲水
熊野見たきと泣き給ひけり　芭蕉

俳諧七部集の一書。

猿蓑集　去來・凡兆共撰。二冊。元祿四年刊。芭蕉は元祿三年四月幻住庵に入り、同年秋無名庵にうつり、元祿四年四月嵯峨の落柿舍に閑居した。本集は其間に成立した。去來の考では、「冬の日」・「春の日」は小冊子であり、尾張中心のものであつた。「曠野」は必ずしも正風に純なものとも考へられない。芭蕉の俳諧は奥羽行脚以來一變した。その新風を代表さすべき撰集があつてもよからう。それには芭蕉の嚴重な指導の下に成つた末代の龜鑑たるべき集でなければならないと云つたやうな抱負と熱誠を以て編輯に當つた事であらう。芭蕉としても從來の撰集とは違つた態度で、本集を監修したのであつた。それは「去來抄」其他の書を見ればよく分らう。之はひとり芭蕉ばかりでなく、撰者の間にも選句に就て意見を上下し、容易に下らなかつた樣子が見える、其角は芭蕉の句を翁と署名したけれど、芭蕉はそれを斥けて、「世間に廣め、人に沙汰せんには、却て淺間なるべし。云々」と云つて（旅寢論）、やはり芭蕉と書かせた。是等も本集の撰が一般的であつた愼重性を知る一參考であらう。撰者去來は向井氏、名は兼時通稱平次郎、落柿舍と號する。父元升、長崎聖堂の祭酒、兄玄端・弟魯町・牡年、妹千子、甥卯七、共に俳人であつた。八歳の時父と共に上京し、武藝を學んだが、二十四五歳頃弓矢を捨て、嵯峨の落柿舍に隱れた。性篤實、許六より天晴中華門人の第一と推され、芭蕉より關西の俳諧奉行に擬せられたといふ傳說さへあつた、

可南（カナ）といふ妾があつて、二人の女の子がゐた。寶永元年九月十日歿、行年五十四。凡兆は野澤氏、はじめ加生と號した。加賀金澤の人。京に住し醫を業とした。性剛毅と云はれた。後罪ある人と交り、投獄されたので、自分から身を退いたと云はれるけれど詳かでない。正德四年歿。內容は晋其角序、丈草漢跋、發句三百八十二（芭蕉四十一、其角・去來各二十五、凡兆四十二）、附句四歌仙、幻住庵記、凡右日記を收めてゐる。本集は古來非常に尊ばれたもので、許六は「宇陀法師」に、「前猿蓑は俳諧の古今集也。初心の人去來が猿蓑より當流俳諧に入るべし。云々」と賞揚し、支考は「發願文」に、「猿蓑集に至りて、全く花實を備ふ。云々」と論じてゐる。實に本集は芭蕉變風の中心撰集であつた。

初時雨猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

なが〳〵と川一筋や雪の原

時鳥何もなき野の門ゝ構へ　去來

百舌鳥鳴くや入日さし込む女松原

荒磯や走り馴れたる友千鳥

初露や猪の臥す芝の起あがり　其角

鉢たゝき來ぬ夜となれば朧也

雜炊の名どころならば冬籠

鶯や遠路ながら禮かへし　丈草

一月（ヒトツキ）は我に米借せ鉢たゝき

附句は前三歌仙が面白い。高雅で、寂びがあつて、緩急自在であつた。市中やの卷、名殘表から裏にかけて、

草庵にしばらく居ては打破り　芭蕉

命うれしき撰集の沙汰　去來

さま〴〵に品かはりたる戀をして　凡兆

浮世の果はみな小町なり　芭蕉

何故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　去來

市中やの卷に、千葉縣流山町秋元洒汀氏藏の眞蹟がある。又「むつのゆかり」に也寥禪師傳來の猿蓑草稿の一部が出てゐる。併し二者同一ではない。

猿蓑の註書には樨柯の「猿蓑逆志抄」が最詳しい。何丸の「七部集小鏡」も參考にならう。近頃では新田寛氏の「猿蓑評釋」が善本である。

芭蕉庵は奥羽行脚の際人に讓つて了つたから、此冬は一時橋町に寓居した。仙化が父の追善に、

袖の色よごれて寒しこい鼠

元祿五年、芭蕉四十九歳の春を橋町（彦右衞門店）で迎へた。「栖去之辯」の作があつた。二月、圖司呂丸の死を悼んで、

當歸よりあはれは塚のすみれ草　芭蕉

支考との兩吟歌仙成。

鶯や餅に糞する椽の先　支考

日も眞直に晝の暖か

曲水に俳人の階級に三種の別ある手紙を送つたのも此頃であらう。卽ち三等文である。五月、支考の東行に餞し、

此心推せよ花に五器一具

彼が侫なる生得を見屆けた訓戒であらう。五月半、舊庵の傍に芭蕉庵を再興した。竹人の「全傳」に、「古き芭蕉庵は山氏素堂序製りて、貧主が志をあらはし、其角・一晶等勸進の聖となりて、風士の輩に一紙半錢を乞ふ。今年辛未（壬申の誤か）の夏、杉風一人の施主となりて、聊か枳風が志を相兼ね、住居は曾良・岱水が物好に任せて、三間の茅屋池に臨みて立てり。云々」とある。「芭蕉を移す辭」

によると、新庵は舊庵より廣かつたやうで、位置は舊庵の近くであつた。富士の佳景を仰ぎ、三股の月を眺める便もあつた。名月のよそほひに芭蕉を植ゑると、その葉が擴がつて、琴を覆ふほどになつたなどとある。

夕顔や醉うて顔出す窓の穴

晋の淵明をうらやむ

窓形に畫寢の臺やたかむしろ

芭蕉庵には淨求といふ無智文盲の召使が居つた。茶を煮る事が上手で、芭蕉によく仕へた。七月七日、素堂の母の七十七歳の壽を祝して、嵐蘭・沾德・曾良・杉風・其角・素堂・芭蕉七人の句作があつた。

七株の萩の千本や星の秋

八月九日、許六桃隣の紹介で入門する。許六の「自讃之論上」に、「予明の年七月又東武に赴く。此時翁に對面せん事を喜ぶなり。橘町より深川芭蕉庵再興して入り給ふ年なり。江戸着の日數經ず、桃隣手引して、八月九日深川の庵を叩き、師弟契約のはじめなり。一座に嵐蘭・桃隣・淨求法師なり。桃隣云ひけるは、翁へ發句持參あるべしといふに任せ、桃隣執筆して、四五句はじめて呈す。云々」とある。許六は以前から芭蕉に逢はうと思つてゐたが、芭蕉が近江に居る時は、許六江戸へ下り、許六故山にゐる時は、芭蕉江戸に下るといふ工合に、いつもかけ違つて逢ふ折がなかつた。それがやつと今歳の秋逢へたのである。その時許六の見せた句に、「十團子も小粒になりぬ秋の風」といふのが芭蕉から激賞された。此句は二十句ばかり作り直し、二日案じて、やうやく小粒になりぬと思付いたのである。許六はその以前尙白に二度逢ひ、其角に兩度會合しただけで、餘は專ら「曠野」・「猿蓑」を熟讀して、正風の眞髓を探り得たのである。芭蕉も、「愚老が魂を集にてさぐり當つる人は、門弟子に許子一人なり。……愚老が本望今日達せり。」と云つて喜んだ。許六は森川氏、通稱五助、五老井・菊阿佛と號した。近江

彦根井伊侯の臣、三百石を領した。はじめ支考と親しく、後その不信を惡んで絶交した。性傲岸・不遜、取合法を信じ、同門諸子を罵る。正德五年九月二十六日歿。行年六十。「篇突」・「宇陀法師」・「歴代滑稽傳」・「正風彦根躰」の編著がある。桃隣は天野氏、藤太夫と云。伊賀上野藤堂家の士、二十歳頃仕を退き、元祿四年芭蕉に從つて江戸に下り、點者を業とし、吳竹軒・太白堂と號し、一派を開く。最初は貧しかつたが、後裕富になつた。芭蕉の嫌ふ前句附の點者もした。俗な男であつた。享保四年十二月歿。行年八十二。「陸奥衞」の著がある。芭蕉の從弟であつた。

閉關　八月中、芭蕉は「閉關の說」を作り、門を閉ぢて人に逢はなかつた。

朝顏や晝は鎖おろす門の垣

閉關の說の冒頭に、色は君子の惡む所で、佛も五戒の初めに置いたけれど、さすがに捨てがたい情もある。遊蕩に身を持ち崩す例も多いが、長生きばかりしたがり、米錢の中に心を苦しめ、物の情をわきまへない者よりは罪が淺いなどと云つて、暗に自分の遊蕩時代の昔を辯護するやうな口吻を洩らしてゐる。かういふ點から或人は、芭蕉の情婦壽貞尼が、此頃芭蕉庵に來てゐたのだらうと憶測するけれど詳かでない。談林派の中村西國が、芭蕉庵を訪れて逢へなかつたのも此時であつた。併し間もなく芭蕉は門人とも逢つて句作してゐる。こゝらは芭蕉の詩人らしい所で、自適な生活を送つてゐたのである。

深川夜遊　九月、膳所の洒堂江戸へ下り、芭蕉庵に越年。翌年（六年）二月のはじめまで止まつた。その間芭蕉・嵐蘭・許六・杉風・岱水等と附合つた集を深川集（元祿五年刊）と云つて、七部集の一に擬せられてゐる。

青くてもあるべきものを唐辛子　芭蕉

提げておもたき秋の新ゝ鍬　洒堂

九月二十日餘り、洒堂を連れて、淺草の嵐竹亭を訪れ、洒堂・嵐竹・芭蕉・北

鯤・嵐蘭五吟歌仙十句成。

刈株や水田の上の秋の雲　酒堂
暮れかゝる日に代かゆる雁　嵐竹
衣打つ麓は馬の寒むがりて　芭蕉

九月末、女木澤（ヲナギザワ）の桐溪亭を訪れ、

秋に添うて行かばや末は小松川　芭蕉・許六・酒堂・岱水・嵐蘭五吟

十月三日、洒堂を連れて、許六亭を訪れ、芭蕉・許六・洒堂・岱水・嵐蘭五吟歌仙成。

けふばかり人も年寄れ初時雨　芭蕉
野は仕付けたる麥のあら土　許六

又許六亭にて、洒堂・許六・芭蕉・嵐蘭四吟歌仙成。

洗足に客と名のつく寒さかな　洒堂

綿館ならぶ冬むきの里　許六
みそさゞい階子の鎰（カギ）をつたひ來て　芭蕉

支梁亭口切、芭蕉・支梁・嵐蘭等八吟歌仙成、

口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉
箏（タケノコ）見たき藪の初霜　支梁

許六も芭蕉庵を訪れ、芭蕉・嵐蘭と三吟歌仙。

寒菊の隣もありや生大根　許六
冬さしこもる北窓の煤　芭蕉

許六の「滑稽傳」俳諧指南に、「此句世間煤を雪とする句なり。煤の一字俳諧の讀方にして、達人の手柄といふは是なり。云々」とある。

深川大橋の半ほど出來かゝつた時、

初雪やとけかゝりたる橋の上

十二月二十日、芭蕉・彫棠・其角等六吟歌仙成。

うちよりて花入探れ梅椿　芭蕉

降り込むまゝの初雪の宿　彫棠

素堂亭の忘年會に招かれ、嵐蘭・曾良・酒堂・素堂と句作。

節季候を雀の笑ふ出立かな　酒堂

年忘盃に桃の花書かん　素堂

膝にのせたる琵琶の木枯　芭蕉

宵の月よく寝る客に宿かして

草庵行事　元祿六年、芭蕉五十歳。芭蕉庵に春を迎へて、

年々や猿にきせたる猿の面

歳旦吟である。無季の句として許六・去來の論にあつた句である。

正月末、嵐蘭の子に嵐戎といふ號を與へる。二月、是橘剃髪、醫門に入るを祝して、

初午に狐のそりし頭哉

酒田の不玉の獨吟歌仙に判するといふが、奥書が芭蕉の言らしくもないから信じられない。酒堂上方にかへる。

湖水の磯を這出したる田螺一匹、芦間の蟹のはさみを恐れよ。牛にも馬にもふまるゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬ごもり。

三月、甥の桃印芭蕉庵で歿した。三十年餘芭蕉が面倒を見た人であつた。僧專吟の伊勢・熊野參に餞別する。僧專吟に餞別の辭といふ文があつた。

鶴の毛の黑き衣や花の雲

露沾公の亭に伺候し、

西行の庵もあらむ花の庭

草庵花月に富む。

草庵に桃櫻あり。門人に其角・嵐雪あり。」

兩の手に桃と櫻や草の餅　芭蕉

翁に馴れし蝶鳥の兒　嵐雪

三月三日の興行か。後安永三年「俳諧未來記」と題して、雪中庵門の周竹によつて出版された。四月、愁傷を慰めるため、水邊の時鳥の句作をする。

一聲の江に横ふやほととぎす

時鳥聲横たふや水の上

二句の優劣を沾德に乞うたが、結局山口素堂・原安適などまでやつて來て、水の上の方が善いといふ事になつた。五月六日、許六が木曾路を經て、舊里に歸るを送り、次郎兵衛に手紙を持たせ、且つ色紙・短冊・繪讃の類を贈つた。

椎の花の心にも似よ木曾の旅

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

「柴門ノ辭」がある。次郎兵衛は去年の十二月頃伊賀から芭蕉庵へ來て居つたものらしい（江戸下り前後の條下參照。）

七月七日、兩星を弔ふとあつて、七夕小町の歌に題し、

高水に星も旅寢や岩の上

とする。弔初秋七日兩星の文があつた。

八月八日、「三日月日記」成る。芭蕉・素堂の和漢である。草稿は以前圖司呂丸に與へる。圖司は羽黑山の圖面を司る役、姓は進藤氏。支考出版の「三日月日記」は勝手に修正したもので信じられない。八月十六日、芭蕉庵月見。芭蕉・濁子・岱水・依々等七吟歌仙成。

十六夜はわづかにやみの初哉　芭蕉

鵜舟のあかをかへるさび鮎　濁子

八月二十七日、嵐蘭病死。鎌倉遊覽の歸途病を得たのである。悼嵐蘭詞がある。

秋風に折れて悲しき桑の枝

八月二十八日、其角の父東順歿。東順傳がある。

八月の跡は机の四隅哉

嵐蘭初七日墓參、九月三日。

見しやその七日は墓のみかの月　濁子

九月十三夜月見。濁子・曾良・芭蕉等七吟歌仙成。

十三夜曉やみのはじめかな　曾良

小袖の糊のこはきうす霧　芭蕉

燒飯に瓜の粕漬口あけて

十月九日、素堂亭菊花の宴に招かれる。

菊の香や庭に切れたる履の底

十月二十日、深川卽興。芭蕉・野坡・孤屋・利牛四吟歌仙成。炭俵出。

振賣の雁あはれなりえびす講

芭蕉庵にて、芭蕉・野坡兩吟歌仙、三十二句にて止める。芭蕉の意に適せぬ句が多かつたからであつた。

寒菊や小糠のかゝる臼の端　芭蕉

提げて賣行くはした大根　野坡

藤堂玄虎の旅館にて卽興。一折。

武士の大根からきはなしかな

深川新大橋出來上る。

有難やいただいてふむ橋の霜

芭蕉・岱水・杉風三吟歌仙一折。

生きながらひとつに氷る海鼠かな　芭蕉

ほどけば匂ふ寒菊の菰　岱水

歳暮、芭蕉庵にて、

有明も三十日に近し餅の音　炭俵　野坡・孤屋・利牛共撰。二冊。元祿六年冬、二三子芭蕉庵に會し俳談の折、芭蕉の、金屏の松の古さよ冬ごもりの句に感心し、附けはじめて、篇成り、炭俵は俳なりけりで題號とした。卽ち成年は元祿七年閏五月、刊行は同年六月であつた。內容は發句二百五十餘句、歌仙七卷であつた。芭蕉晩年の風は輕みにあつた。此風は曠野時代既に表れてゐたが、手近な所では深川集の、

乘りかけの提灯しめす朝嵐　嵐蘭

潮さしかゝる星川の橋　芭蕉

如きはその例であつた。元祿七年五月、芭蕉が西國行脚の際、江戸子珊の別座敷に於て俳談の折、「今思ふ體は淺き砂川を見るが如く、句の形は心ともに輕きなり。云々」とあつて、芭蕉は輕み風によつて最後の花を咲かせたのである。同年九月十日、杉風に宛てた手紙の中に、「上方筋別座鋪・炭俵にて色めきわたり候。云々」とあるのでも、その流行は知れよう。後世に於ける炭俵の影響は非常なものであつた。之は恐らく芭蕉最後の新風であつたからであらう。雪中庵吏登は「七部捜」に、「炭俵がよい手本なり。先師（嵐雪）も此歌仙が生涯の出來ぢやと云はれたげな。此炭俵を曲尺にして置いて、時々の風體はどのやうにもやるがよきなり、云々」と云ひ、風之は「俳諧耳底記」に、野坡の說として、「初心の人は……先づ炭俵集を手本として、翁の風流を學ぶこそめでたかるべし。炭俵の風流は翁の極意の所にて、すなほに愚に安き所なり。云々」とも論じてゐる。又曲齋は「婆心錄」に、「此集の一體たるや、……只無味の中の味を專として、淡しき事たゞふべき集なし。……昔より此集を徒に眞似し人の卷を見るに、たゞ田舍菜に酢をかけたるやうにて、其色の靑きこそ似たれ、風味に於ては似るべくもあらず。

……今世の人には祖翁一世の變化だに學ばず。只此一集の無味を甘んじ違へて、俳諧はこゝに止まるものと覺えけるが、既に百年此一體にうはべのみ似たるものに固して動かざるは、當風味を得たるにあらず。云々」と論じ、天保以降の俗調の、炭俵皮相の模倣に止まつた事を喝破してゐる。炭俵の發句は一體に淺く俗で、たま〳〵佳句があつても、引立たない。

長松が親の名で來る御慶かな　野坡

五人扶持取りてしだるゝ柳かな　利牛

ほとゝぎす鳴く〳〵風が雨になる　孤屋

星合にもえたつ紅や蚊屋のへり　芭蕉

こほろぎや箸で追ひやる膳の上

傘に押分け見たる柳かな

連句の方が發句より遙に勝れてゐる。最初の梅が香にの卷がよく出來てゐる。

名殘ノ表三句目あたり、

こちにもいれどから臼を借す　野坡

方々に十夜の内の鐘の音　芭蕉

桐の木高く月冴ゆるなり　野坡

門しめてだまつて寢たる面白さ　芭蕉

拾うた金で表がへする　野坡

註書は宜麥の「續繪歌仙」の内、臼人（アツウン）の「炭俵註」、梅室の「梅林茶談」の内などにある。

撰者野坡は志田氏、通稱彌助。越前福井の人、淺生庵と號する。江戸に出で、越後屋の手代となる。芭蕉歿後大阪に住み、粟津の無名庵を大阪高津野に移し、高津ノ翁と云つた。後西國に旅行し、元文五年一月、日向で歿した。行年七十八。「八鳥放生日」の編がある。僞說をいふ男でうつかり出來ない。利牛は池田氏、

通稱十右衞門。蜂須賀侯の足輕であつたが、後越後屋の手代となる。孤屋は小泉氏、通稱小兵衞。越後屋の手代ださうだ。

西國行脚の意圖　元祿七年、芭蕉五十一歲。最後の春を江戸の芭蕉庵で迎へた。餘程體も衰へたと見え、淺漬が齒にしみ渡るやうになつたから、年の名殘も近付いたのだらうと、正秀に文通した。併し旅行癖が動き出して、

蓮葉に聞かばや伊勢の初便

二月、野坡と兩吟。炭俵に出。

梅が香にのつと日の出る山路哉

桃隣・沾圓・野坡・如行・正秀・許六の三ッ物の風を批評する。三月、芭蕉・沾圓・馬莧・里圓の四吟歌仙成。續猿蓑に出。

八九間空で雨降る柳哉

春興である。沾圓は奥州須賀川の人。野々口立圓は沾圓の母方の親族であつた。服部氏で能役者。通稱實生太夫といふ。芭蕉入門は元祿六年の冬であらう。或夜立圓より夢想吟

雛ならで名乘をなのる人もがな　沾圓

實植の櫻ことしより咲く　芭蕉

を授かり、芭蕉から三世立圓と改めて貰つたと云。續猿蓑の撰者を仰せ付かつたが、芭蕉歿後實行されなかつた。

傘に押分け見たる柳哉

芭蕉・濁子・凉葉等七吟歌仙成。炭俵に出。

玄虎の旅館にて卽興。

花見にとさす船遲し柳原

上野の花見。

四ッ五器の揃はぬ花見心かな

四月、淺草の素龍亭にて、

木隱れて茶摘も聞くや郭公　芭蕉

桃隣新宅の自畫讃に、

寒からぬ露や牡丹の花の蜜　素龍

芭蕉庵にて、

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

夏の小雨を急ぐ澤蟹　子珊

此脇は素龍が芭蕉庵に十日も泊つてゐた時の吟である。子珊の別屋にて、送別會を催す。芭蕉・子珊・杉風・桃隣・八桑の五吟歌仙成。

紫陽花や藪を小庭の別座鋪　芭蕉

よき雨間(アマアヒ)に作る茶俵　子珊

此會五月八日と日附があるがいぶかしい。五月初めか、或は四月か。

伊賀の旧里に向ふ　五月八日、芭蕉は深川を出て、いよ〳〵伊賀へ向ふ事になつた。目的は老兄の慰問と、長崎へ行つて唐船の往來や聞き馴れぬ人の言葉を聞かうといふ興味にあつた。門人は品川まで送り、つきぬ別を歎いた。

麥の穗を力につかむ別かな　山店

乙州が京橋の宿を訪れて、共に行かうと誘つたけれど、一二日障りがあるといふので止めた。又山店・芭蕉の兩吟歌仙もあつた。

新麥はわざとすゝめぬ首途哉　芭蕉

まだ相蚊帳の空はるかなり

其他淨求法師も指を折り、文字を數へて、餞別句を作つたり、素龍齋全故の「贈二芭叟一餞別辭」もあつた。右の辭によると、素龍は元祿五年冬はじめて芭蕉と逢ひ、或日雨の芭蕉を見に行つて、蓑なし、笠なし、足駄なし、杖もなしと表から訪れると、内から芭蕉がそれに雨降る五月哉と云つたといふ逸話があつた。此行

は次郎兵衛を連れた。草庵の留守は壽貞尼、伊兵衛、桃隣に賴み、杉風にも火の用心を賴んで行つた。

箱根の關を越して、

目にかゝる時や殊更五月富士

五月十一日附（六月十一日の誤か）、杉風宛の手紙に、「拙者道中島田あたりまでは、つかへなども折々音づれ候得共、次第に達者に成候て、道々二三里、日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能き所は馬にも乘り旁（カタガタ）致候て、無恙上着致候。雨天大かた小雨にあひ候て、さのみあつき程の事は無御座候。云々」とある。十五日、島田の塚本如舟亭に入り、三泊する。

五月雨の雲吹落せ大井川

前の杉風宛の手紙に、「十五日、島田に着候て、一夜留候處、其夜大雨風水出候て、三日渡り留候て、十九日立申候。いまだ高水にて、馬のしりがひやう〳〵かくれぬほどの事に候得共、島田の宿は懇意の者共故、馬川越隨分念入、一手ぎは高水をこさするを馳走に致候。云々」とある。如竹亭（杉本氏）でも句があつた。

名古屋に至り、荷兮亭に留まる。

世を旅に代かく小田の行戻り

野水亭に赴くと隱居所を普請して居つた。

涼しさを飛驒の工がさしづかな

涼しさの指圖にみゆる住居哉

越人と相談して、住居の方を採つたけれど、飛仙のたくみの方が勝れてゐようといふ意見であつた。名古屋から荷兮・露川等に案内されて、佐屋へ行つて水鷄を聽いた。杉風宛の手紙によると、名古屋へ寄つて三宿二日逗留、佐屋へ廻つた所、荷兮等例の仲間が道で待ち受け、佐屋へ半日一宿したとあるが、露川の建てた水鷄塚の碑文には、山田何某（山田氏素覽）の亭に五日を留めて、水鷄の一卷を殘す、

云々とある。芭蕉・露川・素覽等六吟歌仙。

水鷄啼くと人のいへばや佐屋泊　芭蕉

苗の雫を舟に投げ込む　露川

なほ杉風宛の手紙に、「名古屋は深川集を手本に若き者共修業の由申候。惣じて俳諧評判の事など有之候得共、他にあたり候事も有之候得ばいかゞ故、書きしるし不申候間、ほのかに筆のはしを御悟候て、最其元御はげみ可被成候。」とある。意味ありげな書方で、詳しくは分からないが、江戸の連中の惡口でも出たものか、或は去來の惡口でも云つたものか。

それより芭蕉は伊勢長島にとゞまり、翌日久居に行き、五月二十八日伊賀へ着いて、老兄・旧友の歡待を受けた。伊賀には閏五月十六日まで逗留し、その間雪芝亭・猿雖亭などで興行があつた。

伊賀を出立した芭蕉は、大和加茂の猪（伊）兵衛の在所に一宿した。閏五月二十一日附、猪兵衛宛の手紙に、「一、當月十六日（閏五月十六日）加茂へ參、平兵衛に一宿。御袋樣・源兵衛殿、あねごなどへ逢申候。御袋御無事に御入候。されども四年以前よりはよほど年も御寄り、耳も遠く御成候。あねごとふたり、貴樣事のみくどくかへすゞ〳〵逢ひ申度申被由難儀致候。云々。一、二郎兵衛道中達者にて、拙者苦勞にも成り不申、能くつとめ申候。」とある。加茂へ行つて伊兵衛の親兄弟に逢つたものと見える。閏五月十七日、大津へ行く。十八日、膳所に滯在。伊賀の親類方は暑いし、蚊も多いから、夏中は膳所、折々京へ出て去來と語り、或は嵯峨の落柿舍に遊んだ。だん〳〵暑くなつて行くから、體もどうかと思ふが、前々から服藥してゐるし、醫者も替へないでゐるから、病氣の事は心配するなと杉風に文通があつた。二十二日、落柿舍亂吟、芭蕉・洒堂・去來等六吟歌仙成。

柳小折片荷はすゞし初眞瓜　芭蕉

間引(マヒキ)き捨てたる道中の稗

瓜の名所蓮臺野、

瓜の皮むいたところや蓮台野

六月、嵯峨野に赴き、

六月や嶺に雲おくあらし山

小倉山院を尋ね、清瀧を眺め、

松杉をほめてや風のかほる音

大井川波に塵なし夏の月

大井川の句は、芭蕉臨終前、園女亭で作つた白菊の塵の句に紛らはしいとあつて、「清瀧や波に散込む青松葉」と改作した。

此頃去來の落柿舍に於て浪花上人芭蕉に入門した。去來・浪花・芭蕉・之道・丈草等九吟歌仙があつた。浪花は越中井波瑞泉寺の住職で、應眞院と云ひ一如僧正の連枝であつた。元祿十六年十月歿。行年三十二。專ら去來の指導を受けて居つた。「有磯海」・「砥並山」などの編がある。

六月十六日、膳所の曲翠亭に遊び月見、芭蕉・曲翠・臥高等五吟歌仙成。續猿蓑に出。

夏の夜や崩れてあけし冷し物　芭蕉

露ははらりと蓮の椽先　曲翠

二十一日、大津木節庵（望月氏、醫）に遊ぶ。

秋近き心のよるや四疊半　芭蕉

しどろに臥せる撫子の露　木節

芭蕉・木節・惟然・支考の四吟歌仙であつた。

七月十日頃、伊賀へ行く途中、粟津の無名庵に立寄り、

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉

大津の本間主馬（丹野）の家で、骸骨が笛・鼓をかまへて能をする繪を見て、

稲妻や顔のところがすゝきの穂

魂祭る頃、郷里にかへり、盆會を營み、尼壽貞の死を悼む。

家は皆杖に白髪の墓參り

尼壽貞が身まかりけるをきゝて

數ならぬ身となおもひそ玉祭

壽貞の死は六月近江に居た時に知つたのであらう。猿雖亭で、土芳と共に稲妻の題にて、

稲妻や闇の方行く五位の聲

玄虎亭にて、

風色やしどろに植うる庭の萩

二十八日、猿雖亭夜話、七吟歌仙成。

あれ〳〵て末は海行く野分哉　猿雖

鶴のかしらをあぐる粟の穂　芭蕉

八月七日、望翠宅にて歌仙。井筒屋新藏といふ。

里ふりて柿の木持たぬ家もなし

十五日、無名庵にて月見。無名庵は赤坂町の兄半左衞門の邸内にあつて、此時新築されたもので、その新庵祝の月見であつた。

名月に麓の霧や田のくもり

名月に花かと見えて木綿畠

今宵誰吉野の月も十六里

二十四日、望翠・惟然・土芳等と八吟歌仙成。表六句目、芭蕉附句。

大八の通りかねたる狹小路　猿雖

師走の顔に編笠も着ず　芭蕉

此卷は壬生山中金龍庵の什物となつた。金龍庵とは攝津荒陵山の北、壬生山淨春禪寺の境内にある庵で、芭蕉が最後の浪花行の際に一時寓居した所で、芭蕉の名けた庵であつた。そこには其他雪芝・芭蕉・土芳等の六吟歌仙も什物となつて殘つてゐた。

殘る蚊に袷着て寄る夜寒哉　雪芝
餌(フヂ)巻ながらに見するさび鮎　芭蕉

九月二日、支考は伊勢より斗從を誘ひ、三日の夜伊賀の上野へ來た。

松茸やしらぬ木の葉のへばり付く　芭蕉
秋の日和は霜でかたまる　元代

芭蕉・元代・支考等の九吟歌仙であつた。なほ京の惟然、熱田から白鴻も來た。四日、夜某亭に會し、惟然・支考・猿雖等と附句した。元說亭でも歌仙一折興行した。

行秋や手をひろげたる栗のいが

此卷伊賀にての歌仙おさめと云はれる。

奈良・大阪吟行　九月八日、芭蕉は奈良の菊見をかねて、大阪へ出立した。芭蕉の兄も此度は別けて弟の體が衰へてゐるやうだから心配でならず、支考・惟然・次郎兵衛などの供の者に介抱をくれ〴〵も賴んで、後姿の見えるまで見送つた。笠置から川舟に乘つて、木津川を下り、錢司(デス)といふ所を過ぎると、山の腰が一面に蜜柑畠なので、支考は先夜「山はみな蜜柑の色の黄になりて」と云つた芭蕉の句を物語ると（此句は元祿七年九月、伊賀の猿雖亭で興行した支考・猿雖・芭蕉等五十韻中、二ノ表五句目の句。松風に新酒をさます夜寒哉、支考の卷）、芭蕉も眺めながら我が吟腸を見せたと云つて笑つた。船から下りて一二里行くと日が暮れたので、猿澤の池の邊に宿を求めた。その夜は月も明るく、鹿の聲も亂れて聞えるので面白くなり、月三更のころ猿澤の池に吟行した。

びいと啼く尻聲かなし夜の鹿

九日、奈良を立ち、暮に大阪へ着いて、洒堂方に泊つた。

菊の香や奈良には古き佛達

菊に出て奈良と難波は宵月夜

然るに十日の曉方から體がふるへ出し、毎曉午前四時から午後八時迄寒け頭痛がして、もしか瘧(オコリ)にでもなつたのかと思つて、藥を飲むと、二十日頃からすつきり止んだ。十三日、今夜は十三夜の月をかけて、住吉の市へ參詣した所、晝から雨が降つて、殊に惡感を覺えたので月見を止めにし、宿へ歸つた。次の夜氣持が直つたので、畦止亭（長谷川氏）に行き、月見の名殘をした。

升買うて分別かはる月見哉　芭蕉

秋のあらしに魚荷連立つ　畦止

芭蕉・畦止・惟然草等七吟歌仙成。車庸亭（潮江氏）、其柳亭句作。十六日夜、去來や正秀からの手紙を見ると、奈良の鹿殊の外減じたとある。二十一二日の夜は雨が降つて靜かであつたので、車庸・洒堂・遊刀等七吟歌仙一折。

秋の夜を打崩したる咄かな　芭蕉

月待つほどは蒲團身に卷く　車庸

二十六日、新清水の茶店（浮瀬四郎右衞門）に遊吟、

所思

此道や行く人なしに秋の暮　芭蕉

岨の畠の木にかゝる蔦　泥足

芭蕉・泥足・支考等十吟歌仙一折。

松風や軒をめぐつて秋暮れぬ

同亭にて秋を惜しむ。天王寺・住吉の濱など心に任せて遊吟し、

此秋は何で年よる雲に鳥

二十七日、園女亭に會し、園女の風雅の美を賞め、

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　芭蕉

もみぢに水を流す朝月　園女

芭蕉・園女・諷竹等九吟歌仙成。二十九日、芝柏亭に行く約束があつたが行かず、發句を遣はす

秋深き隣は何をする人ぞ

其夜から芭蕉泄痢の病起り、十月一日の朝に至る。園女亭で馳走になつた菌の過食が原因だと云はれてゐるが、必ずしもそればかりではあるまい。伊賀を立つ時、伊賀山の嵐に體を冷したり、大阪へ來て水にあたつたり、或はおこりをふるつたりして、體をだいぶ痛めてゐたから、そのためもあつたのであらう。

終焉・埋葬　十月一日、門人も例の調子と思つて、深く氣にもかけないでゐた所、一日の夜中から二十餘度の下痢があり、二日の朝も三十餘度に及んだので、始めて驚き、去來や木節に急飛脚を立てゝ、呼び寄せた。五日、今迄居た之道亭は狹いといふわけで、御堂前南久太郎町花屋仁左衞門の裏座敷を借受けて病床をうつした。風國の追悼吟、「力なく軒を見廻すしぐれ哉」の前書によると、大阪は水が惡いから、芭蕉の養生には京か膳所がよからうと、支考から云うて來たから、風國は北野の南松の木陰に草庵を借受け、戸障子の煤を拂つて、芭蕉の入來を待つてゐる中に、芭蕉は死んで了つたので、此庵も不用となり、主人に返して了つたとある。膳所・大津の間、伊勢・尾張の親しき人々に手紙を出す。夕方支考を召し、殊の外氣が落着いたといふ。六日、前日の暮より或人の服藥で氣持が少し直り、起き返つて白髮の樣などを見せる。影もなく衰へ果て、枯木寒巖に立つやうであつた。七日、朝正秀來り、間もなく洛の去來來る。暮方乙州・木節・丈草・李由來る。去來はしばらくも病床を離れなかつた。それは芭蕉が落柿舍へ來た時、人々は自分を親のやうに思つてくれるが、自分は老いて人々を子のやう

に扱ふ事が出來ないと云つた言に深く感じたからであつたと。木節逆逸湯を用ひる。八日、之道は住吉明神に參詣して病氣延年を祈る。各門人句を奉納する。深更に及び、介抱してゐる呑舟を召して硯をすらせ、

旅に寢て夢は枯野をかけ廻る

「なほかけ廻る夢心」ともしたいといふ。芭蕉は不淨を憚つて、人々を近くへ招かなかつた。呑舟と舍羅は之道の門人で、貧しくもあり、忠實な男であつたから、特に介抱させたのであらう。麻の衣も垢付いたのでよき衣に脫ぎ代へ、夜の衣もうすいと云つて、立派なものをかけた。藥は木節が調合した。九日、支考に向つて、大井川の句は園女亭の白菊の塵に紛らはしいから改作し、清瀧や波に散込む青松葉とした。十日、暮から芭蕉の容體が急變して門人等殊の外に驚き木節は芍藥湯を盛る。支考を呼び、遺書三通を書かせる。外に一通は自書し、伊賀の兄に遺す。是等の遺書は正秀が預つて、木曾塚の舊草にかへる。九日・十日は殊に苦しかつた。次で路通の罪を赦し、歿後見捨てず、風雅の交をつくせといふ。尤それには前に定光坊實永阿闍梨の口きゝもあつたのである。十一日、其角が和歌ノ浦遊覽の途次大阪に來り、芭蕉の病篤きを聞いて大に驚き、病床にかけ付けた。門人等夜伽の句作をする。惟然と正秀は一枚の蒲團を引張り合つて、夜もろくに寢なかつた。

引張つてふとんに寒き笑かな　惟然

支考は芭蕉の句集を出版したいが、芭蕉に話して見てくれと云つて、去來にひどく叱られた。

しかられて次の間に立づ寒さかな　支考

うづくまる藥の下の寒さかな　丈草

丈草出來されたりと云つて芭蕉から賞められたなどといふ逸話が傳へられた。木節は他に名醫を呼んで治療する事を言ひ出したが、芭蕉に斥けられた。十二日、

午頃になつて、目が覺めたやうに見渡すから、粥をすゝめ唇をぬらした。今日は小春日和で暖かく、障子に蠅が集まるので、烏もちを竹に塗つて捕へるに、上手下手があるので笑はれたが、後は何事も言はず、申の刻（午後四時）ばかりに絶世の詩人は大往生を遂げた。其夜遺骸を長櫃に收め、商人の荷物のやうに作り、川舟に乘せて、其角・去來・乙州・丈草・支考・惟然・正秀・木節・呑舟・次郎兵衛の十人が前後を守り伏見に着く。伏見から義仲寺にうつした。淨衣其他は智月と乙州の妻が縫つて着せた。茶色の服であつた。

花屋から支考・惟然の出した伊賀宛の手紙は羅漢寺の僧の伊勢に行くのに托したけれど、途中故障が出來て、上野へ屆いたのは十二日の暮頃であつた。土芳・卓袋は披き見て大に驚き、急ぎ大阪に至り病狀を聞くと既に事切れたといふので、跡を追つかけ、やうやく入棺前に義仲寺に着いた。導師は義仲寺の直愚上人であつた。葬式はいよ〳〵十四日酉の刻（午後六時）であつた。丈草・其角・去來・李由・曲翠等すべて四十人各捻香。そのほか芭蕉の德を慕ひ招かざるに集つた者が凡三百餘人であつたといふ。木曾塚の右に葬る。十五日、門人等義仲寺に會し、無縫塔を造立。碑の表面に芭蕉翁と記し、裏に歿年月日を書き、塚の東隅に一株の芭蕉を植ゑた。

遺書・遺物　十六日夜、正秀が預つた芭蕉の遺書を曲翠亭で披露した。其角・丈草・去來等主なる門人も立合つた事だらう。內一通は芭蕉の自筆で、兄半左衛門に宛てたものである。

御先に立候段殘念に可被思召候。如何樣とも又左衛門　（不明。半左衛門の子だといふ說がある）便に被成、御年被寄御心靜に御臨終可被成候。至爰申上事無御座候。市兵衛（卓袋か）・次左衛門（猿雖）殿、意專老（苔蘇）初不殘御心得奉賴候。中にも十左衛門殿（土芳）・半左殿（半殘）、右之通に候。はゝ樣・およし力落し可申候。以上

十月十日　桃青

松尾半左衞門樣　書判

新藏は（望翠か）殊に骨被折忝候。

此遺書は直接兄へ送つたものではない。土芳・卓袋が曲翠亭へ行つて、遺書を貰つて來たといふ說もあるが、半殘の追悼吟、「夢なれや活きたる文字の村衞」の前書に、「なにはへの飛脚、粟津よりかへりて、忘師の遺書まゐれり。」とあるから、大阪へ出した飛脚が兄の家へ持つて來たものと見える。

三通の遺書は支考の「爲辯抄」・「笈日記」其他に出てゐるが、各辭句の相違があつた。次に竹人の全傳所載の文を記す。

一、三日月記（三日月日記か）、伊賀に有。

一、發句の書付、同斷。

一、新式（是は杉風へ可被遣候。落字有之候間、本寫と改可被校候。）

一、百人一首、古今序註（拔書、是は支考へ可被遣候）

一、埋木、半殘方に有之候。

江戸

一、杉風方に前々よりの發句文章の覺書可有之候。支考校之文章可被付置候。何も草稿にて御座候。

一、羽州岸本八郎右衞門發句二句、炭俵に拙者句になり、公（公正しと）羽と翁との紛れにて可有之、杉風より急度御斷可給候。

右一通

○

一、伊兵衞に申候。壽貞事に付色々骨折、面談に御禮と存候所、無是非事に候。殘候二人之者共十方を失ひ、うろたへ可申候、好齋老など御相談被

成、可然了簡可有之候。

一、好齋老萬御懇切、生前死後難忘存候。

一、榮順尼・禪可坊情ふかき御人にて、面上にて御禮不申殘念之事に存候。

一、貴樣病氣御養生隨分御勉可有之候。

一、桃隣へ申候。再會不叶可被力落候。彌杉風・子珊・八草によろづ御投かけ、兎も角も一日暮可被致候。

元祿七年十月

支考此度働驚深切實を盡候。此段賴存候。庵の佛は則出家の事にて候へば遣し候。

はせを朱印

右一通

○

一、杉風へ申。久々厚志死後迄難忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞不致段、互に殘念無是非事に存候。彌俳諧御勉候て、老後の御樂に可被成候。

一、甚五兵衞殿（中川濁子）へ申候。永々御厚情にあづかり、死後迄も難忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞も不致、互に殘念是非なき事に存候。彌俳諧御勉候て、老後はやく御樂可被成候。御內室樣に不相替御懇情最後迄も悅申候。

一、門人方幾角は此方へみえ、嵐雪を始めとして不殘御心得可被下候。

元祿七年十月

自筆はせを朱印

右一通

以上の三通は何れも支考の筆で、はせをの三字自筆、此內支考此度もとある三行自筆である。云々とあつた。併し「後辯抄」によると、杉風や伊兵衞に與へたものは堅紙で、三日月記・埋木・新式などの遺物の覺書は橫紙で、何れも洛の去來

の代筆であると云つてゐる。支考代筆といふと世間から疑はれるから、去來代筆と偽つたものか。支考のものにはからくりがあるからうつかり出來ない。

芭蕉の遺物には出山佛（長一寸一分）・鐵如意（佛頂附與、長押延べて凡一尺九寸位）・觀音經・紙衾（コヨリ）裂裝（佛頂附與）・被風・銅鉢・木砧・笠（反古澁張、此度新調したもの であらう。十度もかぶらない中に芭蕉は死に、旅宿の柱に懸つてゐたものを、芭蕉歿後義仲寺へ納めたが、後李由が貰つた。李由の得二芭蕉翁之笠一作記といふ一文がある）・菅蓑（襟木綿、茶色）・杖（長三尺五寸斗）・（頭陀内に杜市の詩集、山家集、後猿蓑と題した歌仙三卷、其他がある）などがあつた。以上の中、出山佛は支考に附與、如意は丈草に附與、裂裝以下七品は惟然が貰ふ。去來・其角連名の半左衞門宛の手紙によると綿入一・袷一・肌付一・帶二を花屋から次郎兵衞へ送つて來た。衣裳の類は澤山あるが、大阪出立の際殘らず花屋へ預けて來たといふ。半左衞門の返事に、花屋へ預けた古衣裳はそのまゝにして置いて貰ひたい。外の品は何なりと勝手にするがよいとある。又貞德相傳の烏羽文臺といふのがあるが、之も去來の手紙によると、初め其角に讓らうとしたが固辭して受けない。そこで義仲寺の直愚上人に預けたが、上人も風火災や盜難を恐れて斷られたから、半左衞門の方へ預けたいといふと、返事に、それは貴方の手許へ置いてくれといふので、去來が預かる事になつた。黑塗長さ一尺九寸、幅一尺二寸、高さ四寸、板厚さ三分、筆返し一尺一寸のものであつた。なほ文臺には無名庵文臺（二見形、伊賀上野再形庵藏）・松木文臺・尾花文臺・反古文臺（幻住庵に居た頃作つたもの、曲所藏。後膳所の本多侯にあり）などがあつたと傳へられる。

追悼と句碑　其角・丈草・去來等主立つた者は、七日がほど木曾寺に籠つて、追善に餘念がなかつた。十六日、曲翠は其角を幻住庵に伴ひ、

木枯や何を力に吹く事ぞ　曲翠

と云つた。丈草は七日過ぎても無名庵に寓居して、病氣となり、「朝霜や茶湯の

後の藥鍋」と云つて、去來の許へ遣すと、そのかへしに去來は、「朝霜や人參つんで墓まゐり」と云つた。丈草の佛幻庵は義仲寺の二町許り南、岡山といふ所にあつたから、墓守のやうに其後も長く芭蕉の靈に仕へた事であらう。十月十八日、義仲寺に於て追善の百韻興行があつた。連衆は其角・支考・丈草・惟然・去來等四十三人であつた。大部分は大津・膳所・京・大阪・伊賀の門人である。各愁眉を感じ、巧言を求めず、しめやかに師の靈を慰めたのである。

なきがらを笠に隠すや枯尾花　晋子

温石さめて皆氷る聲　支考

「枯尾花」によると、二七日頃迄の追悼句は近江・京・大阪・伊賀の門人からで、四七頃になつて尾張・伊勢の門人の句も見えた。

江戸では十月二十二日頃になつて、追善興行が始まつた。先づ二十二日夜興行として嵐雪一派の追善興行があつた。同日、桃隣・曾良・岱水等の杉風周圍の連中の興行もあつた。二十三日、露沾・湖春を入れた深川連の興行もあり、濁子亭にて仙化・介我・神叔などの歌仙興行もあつた。其角の留守の興行である。其他追悼句として、露沾・季吟・濁子・千里・素龍・素堂・沾德・李下・野坡・利牛・孤屋等の手向もあつた。原安適の「秋風にたへてしばしば殘りしも霜の芭蕉のあはれ世の中」といふ追善和歌もあつた。十月二十五日、嵐雪は桃隣と共に江戸を出立し、十一月七日夜義仲寺に至り、「此下にかくねむるらん雪佛」といふ一句を捧げた。なほ十二日、嵐雪は京丸山量阿彌亭に於て追善百韻の興行を催した。會者嵐雪・桃隣・其角・丈草・去來・正秀・曲兮・荷翠・野童・風國其他であつた。路通（八十村氏）は元祿元年近江守山の邊で、芭蕉から助けられた乞食であつたが、還俗したり、芭蕉の僞筆を賣り歩いたり、芭蕉の破棄した附合十七體の反古を拾ひ取つて、諸國に弘めたりしたので、同門の許六や越人からにくまれ、曲翠からも意見された男であつたが、芭蕉歿後前非を悔い、師恩に泣いて、「芭蕉

翁行狀記」（元祿元八年刊）を著し、智月・乙州・木節などと義仲寺に於て追善俳諧を興行し、其他四十九日間の供養をまめ〳〵しく催んでゐる。恐らく路通唯一の保護者・同情者は智月親子であつたらう。同書によると、金澤からは北枝・牧童・萬子の追悼吟があり、島田からは如行・如舟、大垣からは斜嶺・怒風などの悼句も見えた。壺中、之も疑問の人物で、元祿四年頃芭蕉に入門したばかりで、「俳風弓」（元祿六年刊）といふ奇怪な名の書を著し、去來の猿蓑に反抗するやうな序を書いてゐるが、元祿八年六月「芭蕉翁追悼こがらし」を刊行して、いたく芭蕉の死を悲んだ。之には風國の悼句も多く見え、正秀興行の百ヶ日の義仲寺亂吟もあつた。熱田の桐葉は十年前の清遊を思出して、東藤等十二人の人々と共に、追善句を手向けてゐる。初七日の追善を終つた支考は、四十九日は伊勢にあつて、大練の供養を修してゐる。支考は元祿八年三月四日江戸に至り、十二日の芭蕉忌には桃隣と共に深川長溪寺の發句塚に參詣した。長溪寺には杉風が芭蕉の「世の中はさらに宗祇のやどり哉」といふ短冊を埋めて、發句塚を建て、「霜枯の芭蕉を植ゑし發句塚」と歎いた寺であつた（元祿七年冬）。浪花も三月十二日義仲寺の塚に詣で、一句を手向けてゐた。

四十九日・百ヶ日の法要も過ぎ去つた。懷旧談は至る所で盡きなかつたであらう。元祿七年十一月十三日の夜、其角・嵐雪・桃隣は去來を嵯峨の落柿舍に訪れ、芭蕉の昔話に夜を徹し、遂に鉢叩を聞いた。支考は元祿八年四月二十二日木曾塚を拜し、一夜を無名庵に借りてゐる。又二十六日猿雖亭に赴き、旧交の人々と共に芭蕉の生前死後の談に及んだ。史邦が杉風の建てた發句塚を拜し、「日の影の悲しく寒し發句塚」と云つて、「芭蕉庵小文庫」（元祿九年刊）を著したのも、亡師に對する追懷の餘情であつた。

一周忌は深川の芭蕉庵で營まれた。嵐雪は「夢人の裾をつかめば納豆哉」といふ句を手向け、許六は「鬢の霜無言の時の姿かな」（韻塞に、亡師一周忌に手づから

畫像を寫して、野坡に贈りて、深川の什物に寄附すと前書）といふ句を捧げてゐる。許六の「自得發明辯」に、「師の亡き追善に、かやうのたわけを盡す嵐雪が俳諧も世に行はれて口すぎをする。世上面白からぬ事也。云々」とあるのは同感である。

元祿九年三月、芭蕉三回忌が洛東東山で行はれた。里圃の「翁ぐさ」は同忌の追善出版であつた。此年三月十七日桃隣の細道行脚が始まつたのは芭蕉追憶の結果である。七回忌（元祿十三年）は支考の主催で粟津の義仲寺で行はれた。集まる者二百三十五名餘に及ぶ盛會であつた。「歸花集」はその追善集である。江戸の七回忌は深川の芭蕉庵で開かれ、杉風・素堂・曾良其他が出席した。杉風の「冬かつら」はその追善記念の句集である。巻末に、「師におくれ、既に七回に及ぶといへども、四序のけしきにつれて忘るゝ事なく、月々の忌日は此庵室において懷舊の句をつゞり、像前に備ふ。云々。言の葉をこまかに慕へ冬かつら　杉風」とある。嵐雪も此時「霜しぐれそれも昔や坐興庵」と云つた。

寶永三年（十三回忌）三月、支考は芭蕉忌を洛東の雙林寺で開いた。萬句興行であつた。その追善集を「東山萬句」と云。出句者は近畿・近江・北越・東海・中國・九州を通じ五百七人、巻の數一萬百句、雙林寺閑阿彌三日興行であつた。許六にも「十三歌仙」といふ追善集があつた。伊勢山田の路草亭乙孝にも「一幅半」といふ追善集が出た。之は芭蕉が伊賀の梢風尼から、右の袖を半分に裁つて作つた一幅半といふ衣服を着て、路草亭に來た記念的な追懷出版である。元祿三年春、「紙衣のぬるとも折らん雨の花」といふ句を巻頭に出す。

支考はなほ寶永七年三月（十七回忌）京都東山雙林寺に芭蕉の碑を建てた。此時の芭蕉傳の碑文は從來有力な參考とされた。鳴海の知足は正德二年「千鳥掛」といふ集を刊行して、貞享四年冬の芭蕉の曾遊を懷古した。巻頭に「星崎のやみを見よとや鳴く千鳥」の歌仙を掲げてゐる。名古屋の越人は支考や許六から芭蕉勘當の弟子也と罵られてゐるが、それは例の惡口で、越人は師を思ふ念の深い篤實

な人物であつた。享保二年刊の「鵲尾冠（ジャックヒタワン）」の巻頭文問はず語、或は同十五年刊の「庭竈集」の芭蕉懐舊の句文は明かに此事實を物語つてゐる。ただ彼は性格が頑固で、古風を慕つて、芭蕉晩年の風に從はなかつた點が、支考等の中傷に乘ぜられる點で、そこが彼の缺點であつた。此二書は支考の中傷に對する辨明であつたらうが、一種の芭蕉追慕の集と見て差支へなからう。享保十年（三十三回紀）支考は法莚を東山の雙林寺に開き、諸國から歌仙並に一人一句を募集、「三千化」といふ追善集を出した。桃隣の「粟津ヶ原」、野坡の「八鳥放生日」もその時の追善集であつた。此頃は大方蕉門の高弟も歿して了つたが、芭蕉の德を慕ふ行事は決して衰へなかつた。芭蕉五十回忌（寛保三年）追善として寒爪の「雪の棟」（延享元年）があり、巽窓湖十の「ふるすだれ」があつた。京に芭蕉堂の建てられたのも其時であつた。蓼太は寶暦十三年（七十回忌）舊庵に近い要津寺で芭蕉忌を營み、明和八年彼の寺に芭蕉庵を再興した。蕪村は天明元年九月、洛東一乘寺村金福寺境内に、芭蕉堂及び句碑を建立した。曉臺も天明三年（九十回忌）芭蕉忌を一乘寺村で營んだ。寛政五年（百回忌）蝶夢の「芭蕉翁繪詞傳」が出た。天保十三年（百五十回忌）西馬の「花の雲」が出た。明治二十年十月十二日其角堂永機は義仲寺に於て芭蕉二百回忌（お取越し）の大法事を營み、七日間の俳諧興行があつた。其後は新派俳句勃興のため、年忌も衰へたけれど、年々の芭蕉忌は俳句の季題として存在する限り營まれる事であらう。

寶暦十一年義仲寺から「諸國翁墳記」が出版された。之は全國に於ける芭蕉の句碑の所在を記したもので、すべて二百三十ばかり集められた。其例に倣つて江戸に於ける芭蕉句碑の所在を說明した宇橋の「茗荷集」（文政五年刊）が出た。それ以後聖地順禮のやうに、句碑の所在地へ行つて實地踏査する人も現れて、野桂の、「茗荷圖會」（文政九年）・「廣茗荷集」（同年）などの記錄もあつた。秋晴れの上天氣に、手便當で、江戸四里四方を歩き廻る樂みは、保健の上にも風雅の上にも

よい思付きであらう。

芭蕉は寛政三年桃青靈神といふ尊號を、時の神祇伯白川資延王から賜はつた。筑又天保十三年百五十年の周忌に際し、朝廷から花の下大明神の贈號があつた。筑後高良山の麓に神社がある。芭蕉の俳德は廣大無邊と云はなければならない。

續猿蓑　芭蕉歿後五年を經て、元祿十一年五月續猿蓑集が出た。井筒屋の附記によると本書は何人の撰であるか分らない。芭蕉歿後、伊賀上野松尾氏の許にあつたのを懇望して、やうやく世に弘める事が出來た。草稿だから書中、或は墨消し或は書入れなどが多かつたが、一字一行を改めず、其儘版行したとある。

本書に就て古來支考の僞書說が有力だつた。此論は先づ越人の「不猫蚊(クヤ)」・「猪の早太」の攻擊に始まつた。併し支考の「削かけの返事」によると、本書は元祿七年の夏、伊賀の東麓庵に於て、伊勢より芭蕉の來るのを待つて、七八兩月の間の密撰で、芭蕉歿後再び清書も恐があるから、去來・丈草を兩奉行にして、草稿のまゝ版行したから、書いて消した所もある。其時請取つた井筒屋のむすこ庄兵衞も手代の橘屋治兵衞も今無事で京住ひしてゐるから、尋ねて聞いて見ろと云ふのである。然るに鶯笠の「芭蕉葉船」には、「續猿蓑を贋作といふ事、これあなかちに贋作といふにあらず。翁編半にして難波へ下り寂し給ふ故に、首尾をも遂げ給はず。草稿伊賀の無名庵にありしを、支考行きて編續せり、尤おのれが名の漏れたるを悔いて、歌仙の内他の名をおのれに盛りかへ、或は名月二句の評、並に今宵の賦などこしらへ入れたり。……されば」といふ句の卷は、續猿蓑の集名に於ける發句故、第一番に編み置き給ひしを、みだりに繰下げなどしたる故、此句何の譯やら知れぬ句となりたり。さりながら、俳諧は翁の俳諧に相違なく、悉く斧正ありて、自筆の中清書並に斧正の草稿と共に秘存せり。……こゝに支考一つ不屈の謀あり。此集己が名を顯し、翁の志を追ひなしたりとせば論なかるべきを、翁の手にてさせねば、己が威光なきにより、

唯此草稿のまゝを寫したる體にて、本書は己れ貰ひとり、寫しを翁の姉聟山岸半殘に與へ置き、時を經て井筒屋庄兵衛へ含めて、何ぞ翁の遺書はなきやと伊賀を搜させ、件の草稿を探し當らせ、庄兵衛が奥書を加へさせて、梓にのぼさせ、己れは飛び退いて、知らぬ顔にてゐたりしとぞ。云々」とある。

要するに本書は支考の僞作のみとは斷じがたく、芭蕉の撰とも考へられない。芭蕉は生前本書の出版を志して、立圃にその撰を命じたまゝ死んで了つたので、入選の歌仙も多少選んではあつたが、そのまゝになつてゐたものを、支考が草稿を入手して、勝手に改竄したものであらう。伊賀の密撰といふが、「削かけの返事」には東麓庵とあるし、「古今抄」には西麓庵にゐましてともあつて、前後が一致しないから、いゝ加減の說と思ふ。竹人の全傳に、「同じ秋（元祿七年八月）新庵（無名庵）にて、續猿蓑草稿吟味の頃、句の仕かた、人のうけなどの事、土芳言ひ出て、貌に似ぬ發句も出でよ初櫻。」とあつて、點檢は無名庵であつた事が分る。芭蕉歿後の句が入つてゐたり、芭蕉の名月の句を批評したり、曲翠亭の歌仙を入れたり、卷末芭蕉の句前に、自分の句を出したりなど、支考の勝手な振舞はかなり露骨に出てゐる。沾圃が撰者の權利を支考に取られて了つたやうなものである。草稿の寫しは土芳の手から出て、也寥に傳はつたといふが、半殘から土芳に傳はり、それが也寥の手に入つたものであらう。

本書の價値は古來相當に認められてゐた。許六は、炭俵・別座敷の風を熟吟しない者は後猿の風に飛入る事は出來ないとか、或はさゞゐのうまみをぬきて、遺經の俳諧を殘したとも論じてゐる。併し私は本書を炭俵の續篇とは考へてゐない。むしろ猿蓑の輕く脫落したもので、猿蓑の續篇と見るべきかと思ふ。本書は二卷に分かれ、上卷は連句、下卷は發句、芭蕉二十五句、支考二十四句、沾圃十九句といふ入選ぶりである。

鶯や柳のうしろ藪の前

白魚の一かたまりや潮だるみ　子珊
冷汁は冷えすましたり杜若　凉圃
朝露によごれて冷し瓜の土　芭蕉
更け行くや水田の上の天の川　惟然
野は枯れてのばすものなし鶴の首　支考

炭俵より野趣がある。田園趣味の輕く寂びた句多く、地味で、割合に統一されてゐる。

連句では猿蓑にもれたるの巻が集中第一である。初裏一句目あたり、

通りのなさに見世たつる秋　支考
盆仕舞一荷で直ぎる鮨の魚　惟然
晝寐の癖を直しかねけり　芭蕉
聟が來てにつともせずに物語る　支考

中國よりの狀の吉左右　惟然
朔日の日はどこへやら振舞はれ　芭蕉
一重羽織が失せてたづぬる　支考

此附方の巧妙さを見よ。實質的で、輕く氣持がほどけて、さすがに僞書だ何かといふ事は出來なくなる。

九　俳　論

芭蕉の俳論は俳話的であつた。理論的に組織立つたものではない。直觀的であり、暗示的である。芭蕉は門人の長所短所を見て、誘導的に敎へたのであるから、甲の人に云つた事と、乙の人に云つた事と、矛盾があるやうに思はれるけれど、それは人によつて敎方・說方を變へただけで、本心は少しも矛盾してゐない。例へば許六には取合せ法をすゝめ、洒堂には黃金を打延べたやうに句作せよと云ひ、支考には俗談平話を說き、去來には不易・流行を分かつて敎へるといふやうな例である。芭蕉の門人は何れも師說を傳へてゐる。併し門人によると、師から敎へられた說を金科玉條のやうに尊んで、他を排斥するやうな傾向の人もあつたけれど、それは芭蕉の本意ではなく、門戶を構へる人の罪であつた。芭蕉歿後の俳壇が四分五裂して、統一を失つた事は止むを得ないが、精神の分化といふ點から考へると、それが普通の事で、かくして蕉門の華かな展開が見られるのであつた。

一、本　質　論

誠の俳諧　芭蕉は誠の俳諧を主張した。誠とは物を觀る態度の純眞性である。物を觀るには本情をつかまなければならない。物を考へるには本意を探らなければいけない、本情・本意を表す事が、風雅の目的で、强ひて言語の技巧を凝らしたり、求めたりするやうな外的な態度では、誠の俳諧は出來ないのである。句の姿は作爲されるものでなく、本情の中に自然と含まれる。例へば「古池や蛙飛込む水の音」の句でも、荒れた草の中から、蛙の飛込む音に情趣を感じて、本情を表したので、そこに作者の誠といふ精神が存するわけである。その態度が芭蕉俳諧の本源であつた。

連俳の別　貞徳の俳諧は俳言の俳諧であつた。俳諧は百韻ながら俳言によつて賦する連歌であるから、俳諧之連歌と云つたのである（增續山井）。俳言とは通俗卑近の言語である。和歌や連歌の用語は雅語であつて、通俗性を持たない。俳諧は庶民の文學であるから俳言が必要で、和歌や連歌に用ひられた言語を捨てなければいけない。併し連歌には連俳兩用の詞といふ制があつて、連歌にも用ひられ、又俳諧にも使用されて居つた。聲にいふ詞はすべて俳言であつたが（音讀する詞といふ意）、連歌にも用ひられてゐた。例へば屏風・几帳・拍子などといふ類である。次に千句興行の連歌で、一座一句物と定められた鬼・女・龍・虎などの詞も俳言と見做された。とにかくかうした例外はあつても、通俗・卑近といふ精神が主意であるから、そのために俳言を主張したのである。

芭蕉の俳諧は貞徳の俳諧よりも一歩進んだ境地にあつた。春雨の柳は全體連歌である。田螺捕る烏は全く俳諧である。五月雨に鳴の浮巣を見に行くといふ句は、詞に俳諧がない。併し浮巣を見に行かうと云つた氣持に俳味がある。霜月や鶴の つくづくと並びゐてといふ發句に、冬の朝日のあはれなりけりといふ脇は、心も詞も共に俳味がない。併し發句を受けて、一首の和歌のやうに仕立てた所に俳味があるなどと芭蕉は論じてゐる（白ざうし）。心持の上に俳味がある。作方の上に俳味がある。それは慥かに芭蕉俳諧の本質的進展で、貞徳の云ひ得なかつた所である。許六は俳諧は自由體であり、貴賤・親疎・都鄙・遠近一事として殘す物なく、云はない事柄はないと說いてゐるがその通りで（篇突）、貞門時代はまだ言語や取材の範圍が限られてゐた。そこを芭蕉は詞の俳諧から心の俳諧に迄進めて來たのである。支考はなほ此說を敷衍して、我門の俳諧には俳諧の心といふものはあるが、詞といふものはない。併し雅言のぬめり（柔弱。歌人・連歌師を譏つた語）には俳諧の體なしと云つても、俗語のいやみも亦俳諧ではない。ぬめりといやみと二つながら俳諧の病であると云つてゐる。

俗談平話　俳諧が俗談平話を用ひる事は、必ずしも芭蕉に始まつてゐない。貞徳が俳言を用ひ、縁語・掛言葉によつて通俗・滑稽の趣を表したことは既にその前提であるが、庶民的な俗談・平話を旨としても、芭蕉は句の品位が卑俗低劣にならなかつた所は偉かつた。「山中問答」に、「俳諧の姿は俗談平話ながら、俗にして俗にあらず。平話にして平話にあらず。その境を知るべし」と云つてゐる。俗談・平話になると、句が野卑となり、理窟に落ちて、俳諧の本意を失つて了ふ傾向があるから、芭蕉は又「俳諧の益は俗語を正すなり。」（白さうし）と論じて、風雅の理想によつてこの弊を救つてゐる。風雅の理想とは寂といふ信念である。寂を理解し、體得する事によつて、俗談・平話が正しく改められるのである。許六の言に、俳諧は俗談・平話を述べれば、誰れにもうまく云へるやうに思はれるがさうでない。言語は五音のひゞきで、眼に見えぬ鬼を泣かせ、武夫の心を和げるものである（篇突）とあるが、之もその通で、風雅の道理を知らなければ、俗談平話も卑俗なものになつて了ふ。

寂、栞、細み　芭蕉俳諧の根本論であるし、芭蕉の生活の基調でもある。よく引かれる例であるが、「去來云、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。例へば老人の甲冑を帶し戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑やかなる句にも、靜かなる句にもあるものなり。例へば、花守や白きかしらをつきあはせ。」（去來抄）。句の色とは句の情調である。事柄は華やかであつても、その氣持に落着いた脫落した品の良い色があれば、それを寂と云つた。寂は寂しい心をねらつて得ようとしても得られない。自然の體得で、青年時代よりやゝ老境に入つた人の氣持である。併し此の敎はすでに連歌にあつた。心敬の「さゝめごと下」を見ると、ひえさびたる方とかふけさびたる方などといふ境地を理想として居つた。心敬の連歌論から考へると、物を隅々まで表したり、或は露骨に言つたりする事を嫌つてゐるから、言葉少なき靜かな奥床しい態度から、

寂の境地は發生したやうに思はれる。次に栞であるが、之も「去來抄」に、「去來曰、しをりは哀なる句にあらず……しをりは句の姿にあり。云々。十團子も小粒になりぬ秋の風。」とある。又去來の「答許子問難辯」にも、「しをりといふは趣向・詞・器の哀憐なるをいふべからず、しをりは句の餘情にあり。云々」ともある。思ふに姿とは表現形式を云ひ、餘情とは言外の意味といふ事になるが、二者何れも表現に就て言つたものらしく、表現によつて寂の氣持が餘情的に深く云ひこめられる句を云つたものであらう。最後の細みに就ては、「去來曰、細みはたよりなき句にあらず、……細みは句の心にあり。云々」（去來抄）とあつて、その感情内容に鋭さがある事を指したものと見える。（心敬は幽（カスカナトホシ）遠といふ意味に解してるらしい）。そして路通の烏共も寢入つてゐるか餘吾の湖といふ句を例に出してゐるが、こんな間の抜けた月並臭い句ではよく分らないが、風之の「俳諧耳底記」に、其角の句を論じた條下に、「鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店と作りて、ほそみを見せられたり。……秋の雲尾上の杉をはなれたりなど言ひしほそみは正風の丸ぬけにて、云々」とある評ならば、よく首肯かれよう。鹽鯛も秋の雲も皆鋭い感覺の句である。二句ともたよりなき句ではなく、強く逞しい感じの句で、句法も緊密して、よく物の焦點を捉へてゐる。

二　風體論

不易・流行　去來の「花實集」に詳說されてゐるが、要するに不易の句は永續性を持つ句、一人の物好きでなく、萬人の等しく稱美する句、時代の趣味好尙を超越した句などを云ひ、流行の句とは時代の一時的趣味に投合した句を指したものである。併し不易と云ひ流行と分かれても、根本に於ては一つであつた。土芳の「白ざらし」に、「師の風雅に萬代不易あり。一時の變化あり。この二の究まり其本一なり。その一といふは風雅の誠也。云々」とある。芭蕉は古今集の俳諧

歌中、「冬ながら春のとなりの近かければ中垣よりぞ花は散りける」、「思ふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつゝ見るよしもがな」といふ二首をあげて、まめやかに思ひ入りたる體の和歌としてゐる（白ざうし）。まめやかに思入りたる體とは、感情が僞りなく深く表れてゐる體であつて、とりも直さず物の本情・本意をつかんだ誠に立脚した句を云ふのであつて、不易にも流行にもその心持が根本になつてゐなければならないといふ譯である。不易流行論は俳風の性質から見た論であつた。

眞・行・草　之は俳風の時代的變化の上から見た論で、支考が主として傳へ、流布したものであつた。土芳の「赤ざうし」に、「師の曰、此道のこゝに出でて百變百化す。しかれどもその境眞・草・行の三つをはなれず。云々」とある。併し此の敎は既に連歌にあつた。宗養の「秘袖抄」に宗牧が宗長から傳へたといふ眞・草・行の敎が見える。支考は「三疋猿」の序に、之を世情にあてはめて、通俗的に解釋してゐるが、眞とはその風の堅く眞面目である事、行とは堅からず、柔かならず、眞と草の中間を行く調子、草とは脫落した平淡な風を云つたのである。今これを芭蕉一代の俳風の變化に當嵌めていふと、冬の日時代は眞の體、猿蓑時代は行の體、炭俵時代は草の體といふ譯にならう。

新しみ　芭蕉は句の新しみに就て常に苦心した。「山中問答」に、「あたらしみを心がくべし。好き句の古きより惡しき句の新しきを俳諧の第一とす。云々」、「赤ざうし」に、「亡師常に願にやせ給ふも新しみの匂也。云々」、其他風國の「菊の香」の序にも、今我等が樂んでゐる境地も、終には古くなつて、後世人が出てどんな新しい境地を拓くか分らない、我はたゞ來者を恐れるばかりであるといふやうな事も云つてゐる。この句の新古論は去來をいたく感動させたものと見え、風國の「菊の香」の刊行もあつたし、去來自も其角に書を與へて、彼が古格をのみ墨守して、流行を追はない事を非難した。併し去來は徒に句作の新しみを

よいとは考へなかつた。「俳諧は新意を專にすといへども、物の本情を違へていふものにはあらず。云々」（去來抄）と云つて、其角の「鶯の身をさかさまに初音哉」の句を難じて居つた。物の本情を失ふと、句は作事となり、虚僞となる。それは誠から出たものとは云へない。芭蕉が其角を評して、定家卿のやうだと云つたのもこの點であらう。一體句の新しみはどこにあるかといふと、例へば野坡は芭蕉の「鶯や柳の後藪の前」といふ句を批評して、「鶯に柳は其比も古く候へども、かくの如く句作り給へる故、あたらしみ第一也。云々」とあつて、鶯に柳の取合は芭蕉當時既に陳腐な趣向であるが、藪の前とかう寫實的にいふと新しくなると論じ、許六は「あたらしみといふは句作りにあり、毎度新しき趣向は稀なる故、句作りにて新しみを付けていふ事也。云々」（宇陀法師、雅文せうそこ）とも論じてゐる。寫實すれば慥に句は新しくならう。併し寫實も似たやうな場所を探つてゐると、遂には陳くなるから、結局は許六の云ふやうに表現手段に訴へて新しくするより外には無いかも知れない。題を箱の中に入れて、其の上に立つて廣く乾坤を尋ねよといふ教も、趣向の陳腐を打破する一手段であつた。之はなほ先へ行つて述べよう。

句勢　句の調子を張らせる事である。例へば去來抄に、「ふるふが如く小糠雪降るといふ句を、先師曰、打あぐるごと小ぬか雪降ると作れば、句勢あり。」となり。

句姿　句の情趣が自然の風姿を傳へる事。去來抄に、去來が妻よぶ雉子の身を細うするといふ句を、初めは妻よぶ雉子のうろたへて啼くとした所、芭蕉云、汝は句の姿を知らない。同じ事もかう云へば姿があらうとて直したとある。

發句の語路　句の口調の平滑な事、句走りである。「去來抄」に、「去來曰、語路は盤上を玉の走る如く、滯りなきをよしとす。……溝川に土泥の流るゝやうに、行きあたり〳〵泥みたるはわろし。云々」。

句位　格調をいふ。格調の低い句は品がない。芭蕉が去來の「卯の花の絶間たゝかむ闇の門」といふ句を評して、句の位尋常ならずと賞めた。つまり句の位は格の高い事にある。句中に理窟を言ひ、或は物をくらべ、取合せた句は位が下るものであると（去來抄）。

三　作　法　論

發句の作法　前に述べたやうに、芭蕉は門人の長所・短所に隨つて、適當に教示した。例へば去來には句毎に念を入れてはいけないとか、凡兆には一句僅に十七字であるから、一字もおろそかに置いてはいけないとか、その他門人によつてそれ〴〵違つた教方をしたけれど、一般にいふと氣鋒を以て作る事を第一義とした。「去來抄」に、「先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席に臨んでは氣鋒を以て吐くべし。心頭に落すべからずとなり。云々」、「赤ざうし」に、「功者に病あり。師の詞にも、俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそ頼しけれ。……氣先きを殺せば句氣に乘らず。先師も俳諧は氣に乘せてすべしとあり。云々」である。氣鋒を以て作れとは、一氣呵成に、大膽に、眞率に作れといふ事である。功者は佳句を作るに苦心して、私意・私情を入れて作るから、物の本情を失つて了ふ。去來は蕉門遲吟第一であつた。或時正秀亭に會合し、發句を所望された所なか〳〵出來ない。芭蕉怒つて云、一夜の程いくばくかある。汝が發句に手間取つたら、今夜の會は空しくならう。と云つて芭蕉は發句をし、正秀は脇去來は第三を附けたが、それも芭蕉に直されて面目を失つた事があつた。「赤ざうし」に、「句作りに師の詞あり。物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし。……句作になるとするとあり。内を常に勤めて物に應ずれば、その心の色句となる。内を常に勤めざるものは、成らざる故に、私意にかけてするなり。云々」とある。此の言は物の印象が未だ殘つてる中に句作する事を勸めた教である。刹那

に感受した印象が消えて了ふと、私意にかけて句を作らうとする。卽ち强ひて言語・表現の技巧を用ひようとする。それでは自然の氣持に合つた句が出來なくなるから作事となるといふのである。

上達の道　俳諧が上達するには多作が第一である。許六の「篇突」に、「芭蕉云、上手になる道筋慥にあり。師によらず。弟子によらず。流によらず。器によらず。畢竟句數多く仕出したる者の、昨日の我に飽ける人こそ上手にはなれり。云々」とある。上手の作者は先の事を考へてゐる。いつ迄も現在の境地に留まつてゐない。昨日の我に飽いた人が上手になるので、下手は一生追付く事は出來ない。至言である。

取合法　材料の配合である。許六之を傳へ、自門の金科玉條とした。「花實集」に、「先師曰、發句は頭よりすら〳〵と云ひくだしたるを上品とす。ほ句は物を合はすれば出來せり。そのよく取合はするを上手と云ひ、あしきを下手といふ。其角曰、物を取合はせて作する時は句多く吟速なり。初學の人是を思ふべし。功成るに及んでは、取合ふ合はざるの論にあらず。」とある。芭蕉は洒堂に向つて發句は物を二つ三つ取集めて作るものではない。黃金を打延べたやうに作れと敎へてゐるが、實をいふと此の方が句は品位があつて格が高くならう。取合はせて作れば句も多く出來るし。速吟となつて、初學の練習にはよからうが、堂に入つた者には取合不取合の論ではない。野坡は自然の作とか一句の神定まるとかいふやうな事を無上道のやうに言つてゐるが、此の說の方が取合よりは根本論にふれてゐよう。

餘韻・餘情　芭蕉は印象明瞭といふ事より餘韻・餘情を尊んだ。「去來抄」によると、尾張の荷兮の句、「蘿の葉は殘らず風の動き哉」に就て芭蕉は、「發句は斯の如くくま〳〵まで、云ひつくすものにあらず。云々」と言つた。印象が明かになれば餘情はなくなる。餘情を尊べば、物をくま〳〵まで云ひ表さないで、

他は讀者の想像に任せるやうに表現しなければいけない。餘情・餘韻を尊ぶ事は連歌の敎で、芭蕉はそれに從つたのである。

題を離れる　題に捉らはれると、句が陳くなる。竹に雀、梅に鶯はいつも附いて居るものではない。芭蕉は題詠の弊を避けて、物の想像化を勸めてゐる。許六云、「世上發句案ずるに、皆題號の中より案ずる。これ無きものなり。餘所より求め來らば無盡藏ならん。例へば題を箱に入れて置き、其箱の蓋に上りて、乾坤を廣く尋ぬるものなり。云々」（篇突）、去來も云、「發句は曲輪の内に無きものにあらず。殊に卽興・感偶するものは多くは内にあり。然れども常に案ずるに、内は少く多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句多きのみならず。第一等類をのがる。云々」（去來抄）とある。曲輪とは範圍である。題の持つ範圍である。その範圍の内から想を拾つて來るのが題詠である。故に題詠は自由に範圍以外に出て詠まないから陳くなり、千遍一律の感を起させるのである。芭蕉はその弊を打破して、門人に新しい句作法を敎へてゐる。

四　附句作法

一般的敎示　「赤ざうし」に、「師の曰、學ぶ事は常にあり。席に臨みて文臺と我と間に髪を入れず。思ふ事速に云ひ出でて、爰に至つて迷ふ念なし。文臺引きおろせば卽ち反古也ときびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒す如し。鍔本に切込む心得、西瓜切る如し。梨喰ふ口つき、三十六句皆遣句などといろ〳〵に責められ侍るも、云々」とある。是等は附方の用意を比喩的に述べたもので、つまり發句は氣鋒を以て作れと云つた敎と少しも變らない。大膽に率直に、前後を顧慮せず、ズバ〳〵と附けて行く、その呼吸が大切であるといふ譯である。一句の技巧に骨を折つて、こしらへ物のやうな句を作る事を戒めたのである。

附句の根本義　「花實集」に、「先師曰、發句は昔より樣々變り侍れど、附句

は三變也。昔は附物を專とす。中頃は心附を專とす。今はうつり・響・匂・位をもて附くる事をよしとす。」とある。此說は芭蕉の古今獨步の見地であつて、同時に蕉風俳諧の特異性を持つ名論である。附物とは物附をいふ。言葉の緣によつて、前句と後句を結付けたもの、心附とは前句の事柄に連關した意味の事を附けるもの、うつり・ひゞき・匂は蕉門獨特の附方であつた。物附は貞門に流行し、心附は貞門・談林に行はれて居つた。是等の附方は何れも一卷の思想の變化を乏しくし、場面の展開を狹くする傾向があつたので、芭蕉は一大飛躍して不卽不離の附方を工夫した。勿論物附も心附も連歌に行はれて居つたが、芭蕉のうつり・ひゞき・にほひは心附の進展と見てよろしい。先づうつりであるが、「花實集」に、

赤人の名につがれけり初がすみ　史邦

烏も囀る合點なるべし　去來

の例を上げて其角の註に、「つがれたりと云ひなるべしと云へるあたり、その言ひ分のにほひ相うつり行く所見るべし。若し發句、名はおもしろやとあらば、脇は囀る氣色なりけりといふべし。」とある。うつりは反映といふ義であらう。俗にうつりがよいの惡いのといふうつりであらう。こゝでは名につがれけりといふ俗談的な表現に對して、合點なるべしといふ表現が、氣持をよく呼應させたのである。名はおもしろやと輕くみやびやかに云つたならば、氣色なりけりと云はなくてはうつりが惡くなる。ひゞきは之も同書に、「響は打てば響くが如し。例へば

榑(クシ)椽に銀土器をうちくだき
身ぼそき太刀の反ることを見よ

此句をあげ、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀に反り打ちかけるしかたして語り給へり。云々」とある。響は前句の調に呼應した調子の句を附ける事で、其間少しの間隙もなく、呼吸がピタリと合ふ氣持の附方を云つたものかと思ふ。緊張した氣持の事柄には、緊張した氣持の事を附ける、そこが相互に響くと

いふのだらう。にほひは風韻といふ義であらうか。古集特に其例句を掲出しないのは、百句が百句に渡つて存するものであるからであらう。支考の説に、「百韻が百句ながら二句の間に籠る。云々」（爲辯抄）とある。位は「花實集」に、「句前の位を知りて附くる事也。云々」

上置の干菜刻むもうはの空
馬に出ぬ日は内で戀する

此前句は人の妻にもあらず。武家町家の下女にもあらず。宿屋・問屋などの下女也。」とある。卽ち前句の人の品位や風俗を探つて、その情趣に適應した句を附けるのである。前句が古代めいた人の有樣を云へば、古風な風俗を附けるとか、浮氣女の事を云へば、うき〳〵した風俗を附けるとかいふ例である。其他俳・景氣とかいふ附句もあつた。俳とは古事の想像化である。貞門では連歌の例に倣つて、古事の句は古事そのまゝを附けたけれど、芭蕉は俳で附けてゐる。例へば

草庵にしばらく居ては打破り
命うれしき撰集の沙汰

之は前句を西行能因の境界と見て、西行・能因のやうな雅人にありさうな事を附けたのである。必ずしも西行能因の事と定めては附けない（花實集）。古事の想像化を附けると、句の懷が廣くなつて、後の附句が樂になり、從つて事柄の變化が自由に展けるからである。景氣附は連歌の名目にあつて、古の宗匠深くつゝしみ、一代一兩句に過ぎなかつたと云はれるが、俳諧では連歌ほど遠慮しない。芭蕉が木導の「春風や麥の中行く水の音の句を褒めて、「陽炎いさむ花の糸口」と附けた例もあつた。とかく景氣の句は古くなると云はれてゐた。

五　法式論

法式に拘泥するな　「花實集」に、其角が差合に就て芭蕉に質問したら、「先

師曰、おほむね御傘・はなび草等を用ふべきとなり。惣じて差合の事はあらましむさへ覺え侍らば、强ひて吟味すべき事にはあらじ。……先師も差合ぐりの上手と云はれんよりは、俳諧に上手のかたあらまほしと宜ひき。云々」とある。又晩山に與へた手紙に、「俳諧御熱心の由先は珍重。物知りにならんより、心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山御座候へ共、心法を守る人はまれ〳〵なるものにて候。季寄の御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候まゝ、考へ跡より可申入候。增山井御用可然候。」ともあつて、芭蕉は法式を深く念頭に置かなかつた。差合ぐり（法式をやかましく穿鑿する事）と云はれんより、俳諧上手になりたいとか、法式學者よりも心の俳諧が肝要であるとかと云つた芭蕉の立場をよく吟味してほしい。併し芭蕉はむやみに古式を破らなかつた。煩瑣な式に拘泥して、附合の運用を妨げるやうな場合には、臨機な處置を取つたけれど、古哲の定めた制に就て、必ずしも服從しないといふわけではなかつた。去來の「旅寢論」に、「凡先師折折古法を破り、新式を定め給ふ事は、制を省き、事を廣めて、句に秀句多からん事を計り給ふなり。……故實をふまへ、みだりに破り給ふ事なし。云々」とある言でも分らう。

發句・脇・第三・四句目の體　發句は連歌以來一座卷頭の吟であるから、初心の輩は遠慮せよとか、或はたけ高く作れなどと種々の制があつた。併し蕉門の發句は必ずしもさうではなかつた。發句は貴人・宗匠の作るもの、大將の位のある所などと論ずるのは、百韻の卷頭であるから、みだりに考へないといふ常識で、品位を持たせたのであるが、百韻の略式なる歌仙が一般の興行となつた蕉門時代には、すべて簡略され寛和されてよろしい事とならう。たけ高く作る必要もそれがために自由になつた。蕉門の發句の實例を見れば分るが、種々な風姿の句があつて、ひとりたけ高き句ばかりありはしない。發句には必ず切字を入れる。之も連歌以來の敎であつたが、芭蕉は必ずしもその制に拘泥しなかつた。去來抄によ

ると切字を入れるのは句を切るためである。切字は初學に句切れを敎へる方便で、形式的なものであつた。切字を入れても句の切れない場合もあるし、切字を入れなくとも句の切れる場合もある。句を切らうと思へば、四十八字皆切字となるし、切るまいとすれば、一字も切字にはならないとある。次に脇句だが、之も連歌以來五脇だとか、發句は客の格、脇は亭主の格といふやうな敎があつたけれど、芭蕉はそれに拘泥せず、ただ發句に打添ひて、その餘情を云ひ表し、發句の趣意のよく分るやうに附ける事を敎へてゐた。手爾波留の制もあつたが、一般には名詞で留めて居つた。第三、大やうに附ける事、之も連歌の敎で、芭蕉もそれに從つてゐた。韻字留の例もあつたが、大體手爾波留で、異存はなかつた。四句目輕きをよしとす、重きは四句目の體にあらず、以上連歌の敎で、芭蕉も之に從つて居つた。

月・花の句　月花は景物の最上であるから、古來貴人或は功者に讓つて、普通の人は作らなかつた。そして折端（歌仙ならば表六句目）からこぼさなかつた。殊に花に花の句は定座（一定の場所）を嚴守した。花といふと連歌では櫻の事で、貞門では春の正花（春の花だけれど、主に櫻の花）、夏の正花（餘花・若葉の花の類）、秋の正花（花火・花相撲の類）、冬の正花（歸花・餅花の類）及び非正花（燈火の花・茶の花香・花子の狂言の類）に分類した。「篇突」によると、花は賞翫の惣名で、昔は花に櫻を附ける例があつた。花の句が櫻の句であつたならば花に櫻を附ける道理はない。茶の出花・藍の出花、皆正花であらうと芭蕉が言つたとある。卽ち花といふのは華やかといふ意味で、華やかといふ趣を賞翫したのである。故に俳諧では花といふ文字で表して、櫻といふ文字を用ひない。櫻といふ文字を使ふ時は、花と區別して考へてゐる。花といふと先づ華やかといふ趣を直覺する。櫻といふ文字では理知的に華やかさを知るけれど直覺されない。芭蕉が茶の出花や藍の出花を正花とした考は、恐らくかゝる見地に立つたからであらうと思ふ。又蕉門では

月花の定座に拘泥しなかつた。「去来抄」に、「卯七曰、花に定座ありや。去来曰、定座なし。花の句は互に大切と譲り合ひ侍る故、裏十一句（歌仙の場合）、十三句（百韻の場合）にて出す。十句・八句は短句なり（花は短句にて作る事は、作者に禮を失するといふ譯で、必ず長句即ち上句で出す事になつてゐる）。十三句目おのづから花の句となり侍るなり。云々」とある。許六も「宇陀ノ法師」に、「月花の座定まれる所なし、七句（百韻の場合、名残ノ裏七句目花の定座）、十三句目（同じく裏十三句目花の座）は下の句にてすまじきためなり。一座の時宜によりて、七句・十三句迄延びたる事也。云々」と云つてゐる。是等は大體貞門の敎であるが、貞門ほど儀式張らないのが蕉門である。月の座は下へ動かす例もあつたが、花は決して定座をこぼしてゐない。花を引上げる例はあつた。去來の說によると、一座に賞翫すべき人があつて、其人に花の句を作つて貰はうと思ふ時、その句前に至り、前句より春季の句を出して望むのである。之を呼出しの花といふ。他の場合は一座に貴人・功者もなく、外に譲るべき人も居ない時、都合のよい場面になつて、呼出しを待たずして花の句を作る。又兩吟の時は互に一本づつの句主であるから、謙退に及ばず引上げて作るなどと云つてゐるが、之も亦古風の慣習であつたと見える。

戀の句　戀の句の取扱方は貞門とは全く違つてゐる。「白ざうし」に、「先師曰、昔より二句結ばざれば不レ用也。昔の句は戀の詞をかねて集め置き、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざるなり。…そのかみ宗砌・宗祇の頃迄、一句にて止む事例なきにもあらず、此後所々門人とも談じ、一句にても置くべき事もあらんかとなり。又或時曰、前句戀とも戀ならずとも片付けがたき句ある時は、必ず戀の句を附けて、前句ともに戀にすべしとなり。云々」とある。連歌では戀の句は春・秋の句と並べて尊んだもので、五句つゞける規則であるが、古風の俳諧では二句より五句迄つゞかせ、一句で捨てない事になつてゐる。併し

兼良の新式追加に、「戀の句只一句にて止む事無念。云々」とあるから、當時一句で捨てた例もあつたと見える。芭蕉の一句說はかゝる例を取つて云つたものであらう。一句で捨てない理由は、戀の句が出ると、相手の作者は戀をしかけられたと云つて挨拶した。又も一つの理由は、戀は陰陽和合の句であるから、一句で捨ててはならぬといふのであるが、是等は古風の式であつた。連歌で初裏の三句目に戀を出す事を待兼戀と云つて嫌つたもので、古風にも此敎示はあつたが、蕉門では構はなかつた。尤蕉門以前は百韻が普通の興行であつたから、その制をやかましく云つたものだらうが、蕉門では歌仙が普通の興行となつたので、自然かゝる制も略された事であらう。古風の季寄を見ると、戀之詞・非戀之詞といふ部門を設けて、多くの語を集めてゐるが、中には戀愛の意味を持たないものも多くあつて、その詞を用ひたとて戀にはならない。芭蕉が詞の戀を捨てゝ、心の戀を主としたのは卓見である。又蕉門では戀を一句で捨てると云つて非難する人もあるが、附合は二句によつて思想內容が明かになるのだから、前句に戀の意を十分持たせて置けば、次の句は戀の意味が淺くとも、必然的に戀の句となつて了ふから、かゝる非難は解消されよう。

六　季　題　論

新しい季題　大方御傘・はなび草・山井等の敎に從つてゐたが、必ずしも古來の制に盲從しなかつた。季題とすべき適當な物があれば、古書にあるなしに關せず、新しく題を制定した、「去來抄」に、「魯町曰、竹植うる日は古來より季にや。去來曰、不覺悟。先師の句にて始めて見侍る。古來の季ならずとも、季に然るべき物あらば、選び用ふべし。先師曰、季節の一つも探し出したらんは、後世によき賜物となり。鹽牡蠣の夜も古來の季節か知らずといへども、五月三十日なれば夏季に定まる。云々」とある。許六は季題に就ての敎を芭蕉から傳へたもの

か、「篇突」に二十五條ほどの説があり、又雲鈴に與へた「雅樂抄」といふ傳書中にも、季題規矩大槩と題して、百八十餘項の季語の説明がある。鴎里の「三四考」に、芭蕉翁口授と題して、季語・季感の説明百七十七條、合考七十九條を傳へてゐるが、後人の竄入多く、芭蕉に季題の論はあつたとしても、それは恐らく「白髪集」や「三湖抄」の説の傳授で、古説のむしかへしであらう。

無季の句　芭蕉は無季の句を作つた。それは當時としては破天荒な試であらう。「旅寢論」に無季の句に就ての質問に答へて、去來云、「先師もたま〳〵無季の句有レ之。然れどもいまだ押出して是を作り給はず。或時宣ふは、神祇・釋敎・賀・哀傷・無常・述懷・離別・戀・旅・名所等の句は、無季の格ありたきものなり。云々」とある。「去來抄」によると、去來はなほ之を敷衍して、無季の句に二つの場合ある事を論じ、一つは句の前後・表裏全く季と見るべき心のないもの他は詞に季はなくとも、心に季のある場合とに分けてゐる。芭蕉が神祇・釋敎以下の句に無季の格を立てようとした考は、是等の句は直接四季の風物の詠歎に關係がない事と、一はその事柄が既に深い感情を持たせるものである事との理由の下に企てようとしたのではないかと考へる。去來も四季のみの句に疑問を持つてゐたやうだが、芭蕉がその理由を明かにしないから默止してゐたのである。

十傳書

俳諧二十五箇條　享保十一年刊、半紙本一冊。芭蕉が去來に與へた傳書だといふ。元祿七年六月の奥書があるが、疑はしい。許六が死ぬ十二日前に書いた俳諧指南の中に、「近年二十五條の秘訣などゝ去來より相傳したりとして、金銀をむさぼり、知らぬ人々をたぶらかす由、沙汰の限り、僞にて大うそなり。愚老が宇陀法師選ある時、二十五條ばかりの秘訣ある由、書きくれよと賴む故に、書き記したるものなり。云々」とある。芭蕉の說としても支考の手の入つたものであらう。

芭蕉翁二十五個條解　半紙本一冊

一名白馬奥義解といふ。

梧一葉　享保十六年刊　半紙本一冊。

芭蕉庵桃青著とあるが信じられない。千之の家に傳はつたものを出版したといふ。寛政八年再刻本の末に、柿園藏書目と題し、俳諧梧一葉抄五冊とある。

俳諧新々式　刊年未詳　半紙本一冊

芭蕉より許六に傳へた傳書で、奥書に、元祿六癸酉春三月、芭蕉庵桃青とある。

白砂人集　刊年末詳　小本一冊

之も芭蕉の許六に傳へたものである。奥書に、元祿六年癸酉三月とある。連歌の書である。

俳諧相傳名目　半紙本一冊寫

奥書に、「右芭蕉翁の遺式無殘令書寫畢。享保九甲辰卯月十六日」とある。誰れが誰れに傳へたものだか不明である。或は露川の名目傳の類であらうか。

蕉門十六篇　半紙本一冊寫

奥書に、元祿七年正月とあるが信じられない。「蕉門七書」の石兮の序に、「十六篇はまことに翁の書かれたれど、中頃思ひかへて反古とせられけるを路通がひそかに盗み出て、世に廣うはせしものとぞ。云々」とあるが、それは芭蕉が加賀の門人へ傳へようとした附合十七體の敎で、本書とは違ふものであらう。

俳諧三部書　寶曆九年刊　半紙三冊

「俳諧之秘記」、「袖珍抄」、「本式並古式」の三部を合せたもの。はせを在判とあるが、「俳諧之秘記」は「蕉門七書」所收の「十六篇」と同一であり、「袖珍抄」は宗養の三好長慶に贈つた「秘袖抄」であり、「本式古式」は昌琢・季吟の説と會席の心得を述べたものであると云はれる。

幻住庵俳諧有也無也關　明和元年刊　半紙本一冊

卷初に芭蕉、末に幻住庵三世主人在判とある。古風の説に芭蕉の句を當はめたもので信じられない。

山中問答　刊年未詳　半紙本一冊

元祿二年秋芭蕉が加賀の山中溫泉で北枝に敎示した説を、北枝が覺書風に手記したもので、後秋江・鶯村の出版にかゝる。鴎里の「三四考」所載の北枝考には、山中問答の芭蕉談より詳細に述べられてゐるが、恐らく北枝の自説も入つてゐる事であらう。

附合十七體

芭蕉が加賀の門人に敎へようとして破棄したもので、それを路通が拾ひ上げて諸國に傳授したと云はれてゐる。

麋塒への傳

白亥の「眞澄の鏡」所載の敎示で、芭蕉が高山傳右衞門に與へた手紙の中に

見える。延寶の末か、天和時代の傳であらう。」

梅の錠

洒堂が芭蕉から傳へたといふ傳書であるが僞書らしい。」

正風直指師說錄

越人が芭蕉から傳へたと鳳朗はいふが僞書であらう。」

芭蕉

出文協承認　ア230186號

昭和十八年五月十五日印刷
昭和十八年五月廿日發行（三〇〇〇部）　定價　貳圓五十錢

著作者　萩原蘿月
東京市日本橋區通一丁目五東海ビル

發行者　靑梧堂
代表者　宇都宮德馬
東京市神田區錦町三丁目一八

印刷者（東東三四六）小出熊司
東京市神田區淡路町二丁目九

配給元　日本出版配給株式會社

發行所　靑梧堂
東京市日本橋區通一丁目五東海ビル
電話日本橋一九六番
振替東京一六六〇三四番
會員番號一一四〇一〇番

文松堂印刷・關根製本

青梧堂が贈る重版圖書

文學博士 島津久基著

紫式部

B6判二五〇頁 ¥一・八〇〒・一五

世界最古の小説として我々が他民族に誇らねばならぬ源氏物語の作者紫式部の傳記とその作品たる源氏物語に就いて餘すところなく書かれてをり特に平安時代の日本女性の生活美を闡明に述べられた島津博士の名著である。讀者は本書によつて世界的大作家紫式部のおもかげを知り、平安美に醉ひ乍ら民族的誇りに興奮するであらう。

駒大・二松教授 鹽田良平著

明治女流作家

B6判 三五〇頁 ¥二・八〇〒・一五

近代文學をあらゆる角度から研究してゐる著者が近代女流文學者十數名の傳記とその作品を論じた近代女流文化史とも言へる書物である。特に明治女性の思想・性格等を認識する上において現代女性にお薦めしたい。

富倉德次郎著

北の兵隊

B6判 二六〇頁 ¥一・六〇〒・一五

京都女專教授の職から、銃をとり、北滿國境の警備に立つた陣中記錄。ひなき戰に立つ兵隊の苦惱陣中に源氏を誦じ北滿の四季を描いた風物詩正に斬戰爭文學の最高版同じ戰野に戰ふ夫を兄を弟を本書によつてしのぶがよい。

既刊 日本文學者評傳全書

- 萬葉皇室歌人 森本 健吉
- 高橋蟲麻呂 森本 治吉
- 山部赤人 武田 祐吉
- 鴨長明 富倉德次郎
- 在原業平 井上 豐
- 小野小町 上田 英夫
- 源實朝 阪口 玄章
- 世阿彌 尾崎 憲三
- 新井白石 濱田義一郎
- 蜀山人 濱田義一郎

新刊 蕪村 暉峻 康隆

近刊
- 二條良基 福井 久藏
- 宗祇 伊知地鐵男
- 平安女流歌人 臼田甚五郎

青梧堂

911.32
H14
3

終